DS
329.4
.T35
1900z

# 目次

目次終

# 中央亞細亞史

文學士　高桑駒吉述

## 序説

中央アジアの歴史は、これを人世一生の經歷に比すれば、恰も搖籃中にある幼兒の傳説のごとし、されば漠然として統一なきことと星雲のごとき傳説中より、正史を覓めんと欲するものは、種々の國體と雜多なる宗教とに接觸すると共に、イラン(即ちペルシア)、インド、ギリシア、スキタイ、支那、トルコ、ロシア等諸國民の歷史に通ぜざるべからざるが故に、その困難實に名狀すべからずと雖も、この地方の歷史は東洋史の上に古今を通じて大關係を有し、加ふるに頗る興味に富めるを以て、百難を排してこれより彼の漠然とトルキスタン(Turkestan)と呼ばれたる地にして、北はシル・ダルア(Sir Darya)、東はヒンヅ・クシ(Hindu Kush)、西はカスピ(Caspi)海を以て限れる中央アジアの歷史を記述し、旁ら支那土耳其斯坦(即ち東トルキスタン)及びシベリア(Siberia)の歷史を說かんとす。

# 第一編　總論

## 第一章　地理的狀態

アジアの大高原が、ヨーロッパ諸國民の注意を喚起せるは比較的近時に屬す、この地方諸民族の宗教、神話、傳說及び科學的硏究の證明によれば、人類の祖先は始めてこの高原より出てしが、後その子孫繁殖して地域狹少を感ずるに及び、その一派は新住地を求めてヨーロッパに向ひ、他の一派は炎熱燒くがごとき印度に下れるが如し。而してその白雪皚々たる高原を下りて四方に散布せるの狀は、實に光彩陸離たる一幅の繪畫にして、詩人の想像またこれに一致す。故に中央アジアを以て人類の發生地とするの說は、道理と想像と兩つながら滿足せしむるものにして、學者またこれを疑ふものなかりしが、近時に至り硏究大に進みて種々の新事實發見せらるゝに及び、この信仰の基礎動搖して遂に倒るゝに至れり。而して尙ほ硏究の餘地を存せざるにあらざるも、今日に於ては中央アジアが世界の他の地方に比して、人類の搖籃と思想せらるべき理由少なし。チベット(Tibet)の高原は一時人類の發生地と思考せられしことあり、隨て中央アジアが古代の史上重要なる地位を占めたるは故なきにあらざ

れども、これ傳説の發端を以て歴史の發端とし、世界の往古を以て數千年に限れる間のことのみ、今日に於ては學者また中央アジアを以て、人類の發生地と信ずるもの少なし。されど若し人類の發生地なる語に代ふるに、高尚なる文明の發生地の語を以てせば、中央アジアは現時に於てもまた科學的研究者の深き注意を値す。彼のバビロニア(Babylonia)、印度、支那等古代の文明諸國は、廣き半圓を描きて中央アジアの周圍に群を成し、エジプト(Egypt)の文化また實に端をその地に發せり。故に高尚なる文明の源泉の一なるを信ずるものは、中央アジアにこれを求めざるべからず。されど中央アジアの世界史上に於ける地位は、漸次大に變化せるがごとし。中央アジアは後代に至りて文明の萌芽を生ぜず、たゞ慓悍なる遊牧種族を出して世界を脅し、繁華なる都市を破壊し、美麗なる田野を荒土となせるのみ。かくて太古より今日に至るまで、中央アジア及びその民族は深き影響を世界人類に及ぼしたりき。

中央アジアの地は世界にありて最も大陸的にして、地理的意義に於てはアジアの内地を包括し、歴史的意義に於てはシベリア、西部アジア及びヨーロッパの平原これに附屬す。狹義にいふ中央アジアは乾燥なる高原にして、蜿蜒たる山脈東より西に走り、チベット、支那土耳其斯坦及び蒙古(Mongolia)の諸地方を區分す。而して茫々たる荒

野の所々農民の村落を見るは、實にその山脈あるによる。蓋し水氣その傾斜地に聚まり、河流となりて土地に灌漑し、住民をして耕作に從ひ且つその地に永住することを得せしむればなり。若しこの河流にして海に注がば、鹽を混ぜる土壤より多量の化合物を取り、土地をして長へに肥沃ならしむるが故に、住民に恩惠を垂るゝこと更に大なるものあるべし。

然れども中央アジアの荒地は數千年の間にその形狀を變ぜり。第三紀にはゴビ(Gobi)沙漠及びタリム(Tarim)河の盆地は海なりしが、その不毛の曠野に變ずるまでは幾多の歳月を要せること勿論なり。氷原シベリアを蓋ひし時代には、この變化の見るべきものあらず、故にこの時代の終には、中央アジアの住民尙ほ比較的灌漑の便に富む地方に住せり、而してこの地方は漸次單純なる曠野及び沙漠となりき。若し文明の發端に關して、中央アジアの重要なる所以を知らんと欲せば、深くこの變化に反して、土地の隆起は古も今も變らず。これを以て氣候は南部に於てもまた殆ど寒冷にして、絕えず住民にその影響を及ぼせり。

狹義にいふ中央アジアは山脈によりて種々の地方に區分せらる。而してこの山脈は東より西に走り、地理上及び歷史上、甚だ重要なる地位を占むるものとす。今試

にこれを列擧すれば、南部には峩々たるヒマラヤ(Himalaya)山脈あり、寒冷なるチベットの高原と、炎熱燒くがごとき印度の平原との間に一大障壁を築き、この二國をしてその相隣れるに拘はらず、互に影響を及ぼすこと能はざらしむ。ヒマラヤ山脈の北には崑崙山脈あり。その支脈と共にチベットとタリム河の盆地とを分つ。而してタリム河の灌域にはまた天山山脈あり。以上の三山脈は皆東より西に走り、途にて一所に會す、その中心はパミル(Pamir)高原にして、この方面に於て中央アジアとツラン(Turan)の低地とを分つ。然れども中央アジアの高原の殘部即ちゴビ沙漠とその周圍の曠野とは、また圓形を描ける山脈によりて境せらる。而してその山脈中最も重要なるものを、西に於てはアルタイ(Altai)、北に於てはサヤンスク(Sayansk)、ヤブロノイ(Yablonoi)の二山とす。アルタイ山外にはシベリアの低地あり、この低地と東部ヨーロッパの平原との間には、たゞウラル(Ural)山脈あるのみ。されど北東に於ては山嶽連亘して道を塞ぎ、東部シベリアの大部を限る、故に中央アジア諸種族のこの方面に移住せるもの少なし。西部に於てはこれに反して、山嶽長へに運動を妨げず、故を以て諸種族はこれを越えて、其勢力を土耳其斯坦及び西部シベリアの平原に擴張せり。南部に於てはヒマラヤ山脈その進路を阻めども、東部に於ては支那の高原遂にその

侵寇を防ぐこと能はず。故に山脈の横走は諸種族の移住的運動に大關係あり。諸種族はその征服的大移住に於ても、通商的移住に於ても、一般に東より西に向へり。而して小移住は大移住に比すれば、文明史上重要なる事件にして、東西の兩文明を連結するに與りて力あり、この點に於て中央アジアに對する學者の注意を喚起す。中央アジアを横斷する山脈の麓には沃地あり、就中タリム盆地の沃地は、旅客をして荒涼たる沙漠を通過することを得せしむ。昔時水の供給豐富なりしや、交通は容易ならざりしも、商旅は皆今日のごとく道を山脈の麓に取りき。故に中央アジアの地勢は、文明及び商業の進路を決定するものといふべし。而して中央アジア商旅の向ふ所二あり、一はカスピ海以東の低地にして、一は東方文化の發生地たる支那これ也。

山脈の交通に關係あること既に是のごとし、故に崑崙山が中央アジアの中心を横斷してアルチン・タハ(Altyn Tagh)、南山の二山と共に、支那の最も膏腴なる地方に至るは最も學者の注意を値す。以上の諸山脈に沿ひ、膏腴にして多少灌漑の便に富む一地方あり、農民をして家をその地に造り、且つ沙漠を越えてタリム河の盆地に至ることを得せしむ、これ即ち近世の甘肅にして文明史上甚だ重要なる地位を占むるものとす。堅忍魯鈍なる支那人が始めて遊牧民と戰を開き、その牧地に武裝的都市及び

屯田的殖民地を拓きて、アジアの內地に至上權を振ひしは實にこの地方にあり。されどこれより先き、始めて東西の風俗及び習慣を接觸せしめたるものも、また道をこの地に取りき。

更に西すればタリム河の流域を經て、甘肅より通ずる二條の道路あり。その南にある者は崑崙山の北麓に沿うて、カルガリク(Kargalik)、鄯善(Cherchen)、ケリア(Keria)、和闐(Khotan)、葉爾羌(Yarkand)の諸沃地を包括し、その北にあるものは天山の南麓に沿ひ、哈密(Hami)、吐魯番(Turfan)、喀喇沙爾(Karashar)庫車(Kuchar)、阿克蘇(Aksu)の諸沃地その間にあり。されど前者は廢れて今用ゐられず、故を以て後者は益々重要となれり。而してこの二道路はカシガル(Kashgar)に會し、崑崙、天山の二山脈を經てフェルガナ(Ferghana)に通ず。哈密は支那に對する中央アジアの鍵鑰にして、その北にまた一道路あり天山の北麓に沿うて土耳其斯坦、南部シベリア、就中イリ(Ili)河の流域に通ず。故に山外土耳其斯坦の平原に主として中央アジア及び支那との貿易によりて繁榮せる、サマルカンド(Samarkand)ボハラ(Bokhara)、ホーカンド(Khokand)、タシケント(Tashkent)の諸都市より、ヨーロッパ、西部アジア及び印度の東方貿易は、皆この地方を經過す。而してこれ等の諸都市はまた谿流によりて灌漑せらるゝ富裕なる諸方の首府にして、且つ遊

牧民の間に介在せる永住的農民の城砦なり。然れども中央アジアは、決して單純なる商路にあらず、その地方にはまた特殊の産物ありて商旅を誘ひ、且つその內地人民の資を增殖せしむ。その産物の主要なるものは鑛物にして、東部土耳其斯坦の硬玉及び軟玉は、今日尙ほ支那に於て甚だ貴重せらる。アルタイ山はまた金屬に富み、この地方をして一種の文明を發達せしめたり。チベット及びシベリアには沙金の産地あり、蒙古はまた多量の鹽を支那に輸出す。植物にて重要なるものは大黃にして甘肅に産し、古代より貴重なる藥品として西方に輸出せらる。シベリア及び北部中央アジアの毛皮は、古代より支那及び西方との主要なる貿易品なりき。

以上は中央アジアの輸出品なれども、この他その住民に對して最も重要なる産業あり、家畜飼養これなり。家畜飼養は曠野の人民をして四方に移住せしむる第一原因にして、またその移住地に制限を加ふるものとす。蓋し遊牧民の永住し得る土地は、單にその家畜の繁殖し得る所なればなり。土耳其斯坦、西部シベリア、東部ヨーロッパ、イラン及び西部アジアの曠野は、馬、牛、羊及び駱駝の牧場に適す、故にこれを飼養する中央アジアの遊牧民は、相率ゐて遠隔なる以上の諸地に移住することを得。されどチベットの犛牛はその繁殖する土地に制限あり、これを以てその遊牧民はまたその

移住地を制限せらる。シベリアの遊牧民またその地方を去りて馴鹿を飼養することと能はず。而して中央アジアの遊牧民のチベット或は北部シベリアに移住することを拒み、貿易と同一路を取りて、主として東方或は西方に向ふは、またこの理由による。彼の中古の佛教求法僧が、南方遊行を企つるに至りしがごときは後代に屬す。

中央アジアと壤を接するものには、東には支那あり、西には地中海沿岸の諸國あり、南にはまた印度あり、而してその歴史は互に離るべからざる關係を有す。故に周圍の諸國を知らんと欲せば、必ず中央アジアを知らざるべからず、中央アジアを知らんと欲せば、また必ず周圍の諸國を知らざるべからず。

印度は屢々中央アジア遊牧民の襲擊を被ふりしも、多年曠野地方に影響を及ぼせること少なし。而してヒマラヤ山は二國の間に障壁を築きて軍隊の冒險を妨げ、且つチベットの地勢は侵入者を近けざるが故に、政治上中央アジアと殆ど何等の關係を作らざらざりき。一三三七年ヂァウナー・モハムメッド・シァー・イブン・トグルク(Djannah Mohammed-shah ibn Toghluq)、兵を率ゐて印度より支那に出てんとせしも、ヒマラヤ山の爲めに妨げられて、その志を果すこと能はず、而して爾後これに倣へるものなし。然れども知識の力は劍火の力よりも强きものあり、宗教及び哲學の淵源たる西北印度は、

漸次感化を中央アジアに及ぼし、佛敎の敎會は遊牧民の生活及び意識を一變せり。されど佛敎はヒマラヤ山を越えて中央アジアに入り、その地方に獨立的發達をなせるものにして、遊牧民の文化と印度の哲學との間には、永久的一致ありといふべからず。

中央アジアと支那との關係は、その印度との關係に異なるものあり。西北支那の高地は、その諸將の兵を率ゐて守備に當れる間、遊牧民の侵寇を防ぐに足り、且つ長城の建築は更に防備を完全にせるも、尙ほ常にその力及ばざるを證せり。支那人巧に遊牧民を操縱し、屢々その一部として邊境の守備に當らしむる政畧を取りしが、事多く志と違ひ、守備兵は或は獨立し、或は中央アジアの同族と結合せり。支那が由て以て曠野の遊牧民と戰ひし武器は、主もにその臣民の武器にあらずして、その文化にあり。中央アジア及びチベットの遊牧民、東部シベリアの山民は、屢々支那を征服せしも、忽ち多數の被征服者に吸收せられ、その蠻勇は高尙なる文化の爲めに殺がれたり。要するに遊牧民は、政治上に於て勝利を得しも、知識上に於てはこれを得ること能はざりき。

西部アジアの文明諸國は、遊牧民の不斷の侵略に對して保護せられたること支那

の比にあらず。カスピ海とヒマラヤ山との間には、ホラサン(Khorasan)及びアフガニスタン(Afghanistan)地方の諸山あり、その東に當りてオクス(Oxus)河及びヤクサルト(Jaxartes)河の膏腴なる地方あり、耕作的殖民地及び武裝的都市こゝに發達し、文明の先驅をなす。されどカスピ海と黒海との間にはカウカソス(Caucasus)山屹立して、遊牧民の古戰場たる南ロシアの曠野と、西部アジアとの間に一大障壁を築けり。而してこの自然の城壁が、西部アジアの膏腴なる平原を保護せる間、その住民は遊牧民の侵寇を免れしも、文明の保護たるイランの民族は遂にその攻擊に屈せり。遊牧民は喜びてイラン、シリア(Syria)及び小アジアに移住し、支那に於けるよりも長くその獨立を維持し、その被征服者の爲めに吸收せられたるがごときは、その一部に過ぎず。

以上述ぶる所によりて見れば、東部と西部との間には顯著なる差異あり。支那は名のみ遊牧民に屈從し、且つ西北の曠野に組織的殖民地を開きて、遊牧民の權力を殺ぎしが、西部アジアの文明諸國はこれに反して、騎馬遊牧民の絶えざる攻擊の爲めに亡び、その地は多年中央アジアの附庸となりき。

東部ヨーロッパの曠野は、南西シベリアの曠野に接し、その間また確實なる境界をなすものなきが故に中央アジア遊牧民の攻擊を防ぐこと能はず。こゝに於てフン(H-

un)、アヴル(Avar)及びマジャル(Magyar)等の諸族は、中央ヨーロッパを侵し、蒙古人は東ドイツに達し、オスマンリ・トルコ(Osmanli Turk)人はアウストリア(Austria)のキーン(Wien)に進みて、その城壁を圍めり。故に東部ヨーロッパには、尙ほ中央アジア遊牧民の子孫たるマジャル人、トルコ人、フィン(Fin)人及び蒙古人住せり。然れども西部ヨーロッパは氣候濕潤にして廣漠なる牧地なく、且つその國民勇壯にして文明また進歩せるを以て、遊牧民の侵寇ありしも、永久的損害を被ふらず、却て西部アジアの文化を傳ふることを得たりき。

## 第二章　經濟的狀態

中央アジアの地理的狀態は前章已に述べたり、而してこれ明かにこの地方の遊牧民と近隣諸國の農民との間に存する經濟的相違を指示するものとす。古代史上この相異なる諸民族の關係は不斷の爭鬪にして、權謀、襲擊、殺傷等慘憺たる一幅の繪畫をなせり。されどこの畫圖は近づきてこれを見れば、恐怖の感念を減ずること多し。蓋し、戰爭はこれ等民族相互の主義にあらずして、その商業上の利益に對する願望は、絕えず種々の生產的代表者をして、互に平和なる交際を結び、その過去の戰鬪を忘れ

しめんと力めたればなり。

多數の遊牧民は多少耕作をなすものあり、而して灌漑の便に富む土地を耕すの習慣は、文明國民に對する掠奪的戰爭の結果なり。遊牧民は原則として捕虜の奴隷を耕作に使役し、自ら力を牧畜に注げり、故に農業はたゞ中央アジアに散在せる諸都市に行はれたるのみ。然れどもアジアに於ては、農業は曠野に於ける牧畜に先だち、或場合に於ては、その永住民實際變じて遊牧民となりしがごとし。但し他の遊牧民が狩獵より直接に牧畜に移れることは勿論なりとす。かくて農業行はるゝ所にありては、社會的秩序は永久的にして、掠奪的遠征の傾向防止せらる。蓋し天變地異、就中惡役流行して家畜を斃す時、人民はその近隣を掠むるよりも、寧ろ土地を耕してその生活を支ふるを得ればなり。されど純然たる遊牧民の生活も、また肆まに諸方に漂泊するものと認むること能はず。キルギス(Kirghiz)の部落にありては、夏の牧場は諸部族の共有地にして、各家族はその見て以て適當とする地を選取す。然れども冬營に適する地方は、相混ずることなき各家族の私有地を形成し、種族の共有地と別區せらる。而して家畜所有者は、その家畜の多少に應じて牧地を占有するの權利あり、その家畜を繁殖せしむるものは、當然またその境界を重んずること農民に異ならず。

遊牧民はその牧場を擴張するの必要に迫まるや、耕作、商工を業とする都市、村落の住民を攻擊せずして、却てその伴侶を攻擊すること多し。蓋し牧畜は直に以て農業に換ふべからず、遊牧民の牧場また直に農民の耕地となすこと能はざればなり。遊牧民は農民の由て以てその生活を支へ能はざる土地を利用するを以てその主義とし、乾燥にして牧草多き曠野にその家畜を放ち、人類の食料に適せざる植物を以てこれを養ひ、これをして乳と肉とを供せしむ。されど農民は、たゞ灌漑の便に富む曠野を利用して、その生活を支ふるのみ。比較的稠密なる人口を支へし耕地は、全然これを變じて牧地となすには貴重に過ぐ。蒙古人の支那を征服するや、その一將は悉く支那人を滅ぼし、その國土を變じて牧地となすの策をたてしが、この策は中央アジアの蠻族にすら喜ばれざりき。而してこれに類似せる計畫は、地を異にして幾分か實行せられざるにあらざれども、概して遊牧民の自覺に出でたりとはいひ難し。されど西部アジアに於ては、その農民屢々遊牧民の爲めに滅ぼされ、灌漑の道衰へてその地は再び茫々たる曠野となれり。遊牧民の農民を攻擊する所以のものは、その移動と奴隷とを欲するにあり、而してその天性爭闘を好み、征服を望むがごとき、またこの欲望を助くるものとす。この動機は實に移住的牧畜者の特徵なり。農民の土地に

對する欲望のごときは、多くその永住に關係なし。

歷史的傳說は好んで遊牧民の戰爭、殺傷、掠奪を記し、これを研究するものをして、その殘忍を惡み、その種族を目するに野獸の一種を以てせしむ。然れどもこの觀察は輕卒に過ぐ。遊牧民は永住民と交際するに、平和を以てその主義とす、戰爭のごときは寧ろ例外なり、而してその平和的交際によりて見れば、遊牧民の天性必ずしも、殘忍にあらざること明瞭なりとす。永住民は平和的競爭に最後の勝利を博すれども、公平なる觀察者は寧ろ遊牧民に同情を表す。蓋し遊牧民の敗北は、その善良なる天稟によるものにして、戰爭のごときはその難境に處する唯一の手段なればなり。かくて遊牧民の特徵は、和戰いづれの場合に於ても著しく見るを得べし。

遊牧民は單調なる曠野に長じ、漂泊の結果、少許の動産を所有するに過ぎず、而してその天性の單純また愛すべきものあり。印度の平原及びイランの庭園に見る思想の花は、單純なる曠野に咲かず。動もすれば、偏狹に失するの嫌ある思想の單純は、實に中央アジアの住民の特徵にして、これその意志をして大勢力を振はしむるものとす。意志の鞏固は遊牧民の由て以て他の種族と戰ふ武器なり。遊牧民はこれによりて、屢々その智識的優者を征服し、また統治せり。されどこの武器の用をなさゞる

所にありては、淡白なる遊牧民は、狡猾なる都市の住民に敵すること能はず。ギリシアの詩聖ホメロス(Homeros)いはく、スキタイは世界中最も正直なる種族なりと。遊牧民は實に單純なり、正直なり、故を以て常に都市の商人等の好餌となり、その愚直を嘲けらるゝを例とす。ハインリッヒ・モーゼル(Heinrich Moser)氏は、キルギス人が土耳其斯坦の市場に於て、サルト(Sart)人の欺く所となりしを述べ、曠野の住民の德義心却て都市の住民に優さることを認めたり。遊牧民の永住民に勝てる時、殘忍なる宴會を開きてこれを祝するがごときは兩者が平生の關係より見れば怪しむに足らざるのみ。

遊牧民の蠻行が、全く其平生の友愛的行爲に反するものあるは、種々の原因あり。農民の生活は規律あり、その勞働は實際一年の全部に亘れども、遊牧民の勞働は決して是のごとくならず、且つその單純快活なる生活は、その氣力を消耗せしむることなし。故に遊牧民はその氣力を保存して他日の用に備へ、活動を欲すれば乃ち猛然として起ち、掠奪し、虐殺してその目的を達せずんば止まず。されど慈悲正直の跡、またこの間に見ることを得べし。士風のごときもまた遊牧民の知る所にして、トルコ種族は之を以て名あり、而して近世のマジァル國民は尙ほこれを維持し且つ尊重せり。

遊牧民は思想の單純と意志の鞏固とによりて、容易に永住民の君主となれり。永住民は半ば文明の爲めにその氣力を失ひ、半ば想像或は商業的精神の過度の爲めにその活動を束縛せられ、また日々の職業に忙殺せられて事物を達觀するの習慣を失へり。然るに遊牧民は、敢然として古代文明諸國の遺址に茂れる荊棘を攘ひて、その道を闢き、光明と太氣とを傳へたり。遊牧民は文明を造らざれども、間接にその進歩を助けたるの功は沒すべからず、蓋し國と國との牆壁を撤して世界的帝國を造り、再び人類統一の思想を喚起したればなり。されどこの思想は、遂に事實となりて現はれず。これに由りてこれを見れば、諸國民が幾千年間經營しきたれる事業は、遊牧民の精力を以てして尙ほ破壞すべからざるものあり、遊牧民は遂に思想の勢力及び高尙なる文明の拘束の前に、その膝を屈すべきや明なり。

## 第三章　先史時代の狀態

太古の事は邈として知るに由なし、歷史は常に近代の事變を記すること詳かなれども、古代の事蹟を傳ふること精しからず、學者の原始時代の研究に望を失ふまた故なきにあらざるなり。科學の證明によれば、人類はシベリアの氷中より發見せらる

る巨象と時を同うせりといふ。故に歴史的研究は假に氷原時代の終りを以て、その發端とせざるべからず、蓋しこの時代以前には、氣候或は地表の大變化あらざりしなり。例へば中央アジアの乾燥を增せるは重要なる變化なれども、これを以て氷原時代の奇異なる現象に比すべからざるがごとし。ヨーロッパに存する長顱（頭蓋の前後の直徑、左右の直徑より長きをいふ）短顱（頭蓋の左右の直徑、前後の直徑の五分の四なるをいふ）二種族の代表者は、中央アジア及びシベリアにあり。長顱種はもと黒人種とその祖先を同うするものなれども、北部に移住するに及んで、皮膚、毛髮美麗となれるものにして、短顱種はまた比較的美麗なる皮膚を有し、その純粹なる代表者は、今日の蒙古人及び北部支那人中にあり。この二種の外別に小人種ありて諸所に分布せること、ヨーロッパに於て發見せらるゝ先史時代の遺物、支那及び日本の古記錄によりて知ることを得べし。然れどもこの種族は漸次他種族の爲めに吸收せられ、文明史上重要なる地位に達せず。是に於て長顱短顱二種族の關係は一層重要となれり。短顱種は今日中央アジアに於て勢力を有す、然れどもこれ、幾多の變遷を經て是に至れるのみ。種々の現象によりて觀察すれば、長顱種は氷原時代の終りに、ヨーロッパ及びアジアの北部に住し、中央アジアの或地方を除けば、この兩大陸に於て勢力ありしこと明なり。アジアに於ける長顱種の子孫はア

イノ(Aino)蒙古語及びフィンノ・ウグリ(Finno-Ugri)語を用ゐる種族中にありて、依然傳來の古語を用ゐるイェニセイ・オスチアク(Yenisei-Ostiak)シベリアに於けるその他の同種族なり。南部に於ては長顱種またチベットに勢力を有す。而して是等の長顱諸國民は、ヨーロッパ及びアジアの北部に發達し、氣候の影響を受けて美麗なる毛髮及び綠色の虹彩を有するに至れり。シベリア及び中央アジアにも、今日尙ほこの種族多し。思ふに長顱黑面は原人共有の特徵なりしならん。

皮膚美麗なる種族が、已に氣候の影響を受けて發達したりとせば、頭蓋扁平なる種族は、文明發達して生存競爭の激烈を減ぜるが爲めに生ぜるものならん。この種の原因によりて生ずる變化は家畜にもまた屢々見る所にして、犬馬豚山羊等の頭蓋扁平となれるはその例に乏しからず。人間また是のごとく、或時代を經過してこの變化を生じ、遂に現在の相違を見るに至れるものなるべし。而して人間の肉體は、今日已に完全の域に達せるが故に、今後更に變化すべしとは想像すること能はず。この說の當否は措て問はざるも、長顱種は昔時アジアに發達し、漸次ヨーロッパにも分布したりしがごとし。而してその原住地は、思ふにアジアの內地なりしならん。されど諸學者の唱ふるがごとくチベットなるか或は蒙古なるか、或は一層西部なる土耳其斯

坦及びイランなるかは、今日未だ詳かならず。

高尚なる文明は端を長顱種に發したるがごとしとは一般の定説なり。信ずべき歷史上の證據によればこの種族はアジアの東部及び西部に於ける兩文明を代表せることと明かなり。實にこの兩文明は互に密接なる關係を有し、少くともその建設者たる兩民族の間に、風俗及び習慣の交渉ありしことを暗示す。東部の支那、西部のバビロニアに於ては、共に鋤を以て土地を耕し、家畜を飼養し、これによりて以て一種の文明を造れり。故にその農業は近世ヨーロッパの農業と、その基礎を同うするものといふべし。されどこれ必ずしも進歩的國民のなさゞるべからざる所にあらず、古代アメリカ(America)の文明的諸國民のごときは、鋤を用ゐることを知らず、獸類に車を挽かしむることを知らず、依然土地を耕すに丁字鍬を用ゐたりき。アジアの東部及び西部に於ては、昔時小麥を以て主要なる穀物とし、家畜飼養の、狀態また同じかりき。古代のバビロニアに於ては、家畜をして專ら車を挽かしめ、その肉を食へどもその乳を飲まず今日の支那また然り。故にこの二國民は、この點に於て全く遊牧民とその撰を異にす、蓋し遊牧民はその家畜の乳を以て主となる飲料とし、これによりて意の向ふ所に移住すればなり。東西の兩文明民族は、後年遊牧民の爲めにその交通を妨げ

られたれども、これより先きその住地を同うせる頃已に馬を飼養せり。されどその背に乘ることをなさず、たゞこれをして車を挽かしめたるのみ。スキタイ族及び蒙古人の好飲料たる馬乳に至ては、またその價値を知らざりき。

然れども兩文明民族共有の特色はこれに止まらず、その銅及び青銅に關する知識のごとき、またその主要なるものとす。金屬細工の發明者は長顱種なりと唱ふるものあり、而して長顱種は昔時アルプス(Alps)山脈に向てヨーロッパに移住し、到る處に青銅を鑄るの術を傳へて遠くブリタニア(Britania)に及べり、南部シベリアまたこの種族の移住によりて、アルタイの金山及び銅山に、一種の文化の發達を見るに至れりといふ。この種のことは、原始時代の歴史の研究進むに從つて一層明かなるを得べし。而して比較言語及び神話は、この研究を助けて驚くべき結果を生ぜしむるものとす。例へば龍の神話のごとし、龍は東部に於ては翼を有する天上の蛇にして幸福を授くる善神なれども、西部に於ては黑雲及び暴風雨を、代表し、年少なる光明の神これを征服すと想像せらる、以てその變化を見るべし。

高尙なる文明は太古中央アジアに於て發達せしがごとし、例令然らずとするも、尙ほ東西兩文明の交涉はこの地に於てせりと信ぜざる能はず。故に歴史上中央アジ

アの重要なる地位を占むるは明瞭にして、文明の發生地を他に求むるがごときは輕卒を免れずといふものあり。果して然らば、この古文明はその初め所を異にして發達し、遂に相結合するに至れるものならん。然れども實際若しその發生地ありとせば、恐らくは東部アジアにあらず、蓋し北部陝西、地方に於ける原始的支那民族の住所は、その西部より移住せることを指示し、その傳說またこれに符合するものあればなり。フェルヂナンド・ラォン・リヒトーフェン(Ferdinand von Richthofen)氏の說によれば、支那民族は初め和闐(Khotan)の沃地を發して、北部陝西の地に移住せるものなりといふ。現在に於ては、實際バビロニアに曾て住める短顱種のスメル(Sumer)人の起原詳かならず、故に土地を耕し、家畜を飼養し、青銅に關する知識を有し、短顱種を、代表者とせる古代の文明は、中央アジア若しくはその西境に發達したりといふも、不可なきがごとし。この文明の影響の下に人口繁殖し、その種族は諸方に移住するに至れり。こゝに於いて北部並びに南部の長顱種は、高尙なる文明に接觸し、その感化を受けたり。エジプト文明のごとき、實にバビロニア文明の枝葉のみ。中央アジアの古文明は、また南部に、感化を及ぼせるの跡あり、例へばアーリア(Arya)以前の印度のごとし、當時印度に於ては家畜を飼養せしも、その乳を用ゐることを知らず、而して古文明の感化

及ばざる所にありては、人民皆山に獵し、河に漁して、最古の生活狀態を維持したりき。但しこの時代は約前四〇〇〇年代の末葉を以てその終りを告ぐるがごとし。

## 第四章　遊牧の起原

耕作を以て遊牧以前に行はれたりとする說は傳來の思想に反す。この思想に從へば、人間は初め自然の產物、次いで牧畜、次いで耕作によりて生活したりといふ。然れどもこの說は學者の疑を招き、遂にエドワルド・ハーン (Edward Hahn) 氏の硏究によりて、之の謬れるを證せり。蓋し始めて鋤を以て土地を耕せしものは、また始めて家畜を飼ひしものなり。されどその家畜を飼ひしは、これをして貨物を運搬せしめんがためにあらず。比較人種學によれば、原人の動物を飼養するは、その目的これを使役するにあらずして、主として伴侶を得てその心を慰むるにあること明かなり。而して最古の動物飼養は、その原因宗敎上の槪念にありとなすものあり。この說一理なきにあらざれども、若し牡牛修飾の古習慣を以て、崇拜の爲めに動物を飼養せる證となすべしといはゞ、誰かまたその臆測に過ぐるを疑ふものあらんや。これを要するに、最古の時代には伴侶として動物を飼養し、漸次その慓悍なるものを化して從順

となし、鋤を以て耕しがたき土地にこれを役するに至れるのみ。彼の動物崇拜のごときは、後世に起れる習慣に過ぎず。

農民が家畜を飼養し、而かもその乳を用ゐることを知らざりし時代には遊牧の思想起らず。始めて全民族をして、家畜によりて生活し、その餘れるを屠りて甚しくその繁殖を害することなきを得せしめたるものは乳の德なり。かくて乳の德世に知られて、乾燥なる廣野は始めて人民の居住に適し、實際權力の源泉となれり。然れどもその土地の性質はその住民をして絕えず相率ゐて諸方に移住し、これによりてその性格に好戰の分子を混じ、且つその物質的文明に不確實の跡を印せしめたることと爭ふべからず。遊牧は經濟的新狀態なり、然れどもこれ突如として起れるにあらず、蓋し牝の或時期を限りて、多量の乳を供給することを知りてこれを飼養するは、多年經驗の結果たること勿論なり。文明の域に進める短顚諸國民は、殆ど牝牛及び牝馬の價値を知らず、支那に於ては今日尙ほ乳を輕視せり。この點に於ては長顚諸國民の功を認めざる能はず。遊牧時代に至りて、アーリア語を用ゐる遊牧民は北部に、セム(Sem)語を用ゐる遊牧民は南部に現はれ、經濟上及び政治上に勢力を振へり。されど支那の文明は尙ほその感化を受けず。是によりて之を見れば、遊牧は西部アジア

及び東部ヨーロッパの曠野に起れること明かなり。バビロニアに於ては、前三〇〇〇年以前、スメル帝國セム遊牧民の爲めに滅ぼされ、征服者は漸次被征服者と混合して一國民をなせり、歴史に所謂バビロニア人これなり。而して他のセム種族は、依然遊牧によりて生活せること、聖書の古譚を見て知るべし。

セム遊牧民の歴史に比して更に重要なるものは、アーリア遊牧民の歴史なり。アーリア種族の起原に關しては、議論紛々として決定せず、これ主として(一)その多數は今尚ほアーリア土語を用ゐる長顱民族の起原如何、(二)アーリア語の起原如何といへる二問題を混同するが爲めのみ。皮膚美麗なる長顱民族は、昔時ヨーロッパの全部とアジアの大部とに分布せし一種族の子孫にして、寒冷なる氣候の影響の下に發達せること、前已に述べたるがごとし。されどアーリア語は之に反して、東部ヨーロッパの低地に起り、遊牧と移住とによりて諸方に傳播せるものとす。この事實と關聯して、更に注意すべきものあり、遊牧は古より常に農業と多少の關係を有し、別に家畜飼養を基礎とせる生活の一方法として現はれたる時なきことこれなり。是によりて之を見れば、古代の移住民は移動及び適應の力を有し、必ずしもその住地を曠野に限らず、種々の事情によりて家畜を飼養すること能はざる所に於ては、鋤を執りて農業

に從へることと明かなり。西部ヨーロッパ及びイランの高原に後年農業の起れるは、これによる。スキタイ遊牧民の古傳說に、鋤と軛とを以て最古の財產となせるがごとき、その曠野が二千餘年前にありてクリム(Crimea)のギリシア都市を經て、多量の穀物を輸出せるがごとき、頗る學者の注意を値す。

アーリア遊牧民の史上に現はるゝに至りしは、イラン及び印度を征服してその地をアーリア化したるによる。種族移動の波は前三〇〇〇年代に西部アジア若しくは東部ヨーロッパに起り、ツランの曠野を越えて南部に向ひ、滔々乎として先づ東部イランの地を侵し、遂にカブル(Cabul)の低地を經て諸地方に汎濫せり。この低地を經て、アーリア種の一部は當時面色漆のごとき長顱種の住せる印度に進みき。

されど多數の遊牧民は尙ほ東部ヨーロッパ及び西部シベリアの曠野にあり、古代のギリシア人はこれを總括してスキタイ人といへり。思ふにアジア、ヨーロッパ兩大陸の低地に住せる遊牧民は悉く廣義にいふスキタイ人にして、非アーリア語を用ゐるもの、またその一部なりしならん。然れども狹義にいふスキタイなる語は、イランの土語を用ゐるスキチア地方の移住遊牧民を呼び、且つ南部に進めるイラン人及び印度人と同種族なることを表示す。サカ(Saka)、マッサゲタ(Massageta)、サルマチ(Sarmati)

及びスコロタ(Scolota)等の諸部族は、殊にイラン人と離るべからざる關係あり、全く土地を耕さゞるにあらざれども、主もに牧畜によりて生活し、喜びて牛馬を飼養せり。スキタイ人は多年文明の域に進めるバルカン(Balkan)半島の山國を窺はず、また一時の外カウカッス山を越えてアッシリア、バビロニアの文明國に進むの望を有せず、イランには漸次その同種族殖民してその地を保護せり。されど東部に於ては、アルタイ山を越えてその勢力を擴張し、他種族をして漸次その生活狀態を變ぜしめたり。故に中央アジアの西部には、この後皮膚美麗なる遊牧民多し。

遊牧民が馬に乘ることを知るは、またその生活の一特徵なり。短顱種に屬する文明諸國民は、古代既に馬を飼養し、これをして車を挽かしめたるがごとし、支那のごとき、バビロニアのごとき皆然り。されどその馬を飼養せるは悠遠なる古代にあらず、何となればエジプトにてはヒクソス(Hyksos)時代を經て、始めて馬を飼養することを知りたればなり。是によりて之を見れば、遊牧民は初め馬を貨物の運搬に用ゐ、遂にその背に乘るに至れるものとす。而して馬に乘ること行はれてより、遊牧民は頓にその移動力を增せり。されど印度のアーリア人が、その移住に際して馬に乘ることを知りしや否やは詳かならず、但しホメロス時代のスキタイ人が、馬に跨れる一民

族なりしことは爭ふべからざるものあり。

遊牧民の鐵を知りしは、文明諸國民に比すれば遙かに遲し。イランのマッサゲタ人は、キロス（Cyros）の時代にペルシア人と戰ひしが、この時代にはたゞ金及び銅を知りしのみ、思ふにアルタイ山及びカウカソス山よりこれを得しならん。

當時東西兩文明の間に尙ほ交涉ありしやは詳かならず。されど若しこれありしとせば、アーリア種の大移住はこれを妨げしこと疑なし。支那國民はこの時尙ほその獨立的發達を繼續せり。中央アジアの遊牧地方或は海路印度を經て支那に達せし刺激は、その勢弱くして顯著なる結果を生ずるに至らず、故に支那國民はたゞ國境の遊牧民の勢力を殺がんとし、遂に農業的殖民地を建設して、これを隔離し、これを慰撫するにその精力を傾注せり。而して支那の敵はアーリア語を用ゐる遊牧民にあらずして、短顱種の一部なり。支那最古の歷史は僅かに遊牧民との戰爭を傳ふるも、狩獵を業とせる土蕃との衝突は多くこれを記せり。この種の傳說は一々信ずるの價値なしと雖も、この後頻々として起れる遊牧民の侵寇につきて何等の記する所なきは、また注意すべきことたるを失はず。

これに反して、西部に於けるアーリア及びセム遊牧民の古代史上に現はるゝや、經

濟上の一形式たる遊牧は、西より東に移り、單に中央アジアの短顱種によりて採用せられたりき。家畜飼養は蒙古、ウラル・アルタイ諸種族よりも早くアーリア種族の間に發達し、貨車の用また夙にアーリア種族に知られしこと、オットー・シュラーデル(Ottoschrader) 氏これを證せり。當時遊牧を採用せし諸種族は、短顱種の一部にして茫々たる曠野に住し、支那及びバビロニアの高尙なる文明を知らず、たゞ山野に獵し、天產物を集めてその生活を支持せしのみ。中央アジアの住民が狩獵より直に遊牧に移りたることは、狩獵を主もなる職業とし、草根木實を主もなる食物とせるを以てこれを知るべし。家畜飼養の望なき北部に於ては住民の多數は、今日に至るまで狩獵を業とし、餘は單に馴鹿を飼養して、その地に適する一種の遊牧に從へり、北部シベリアの住民また然り。されど中央アジアの遊牧民が、特筆するに足る靑銅器時代を有せしか、或は石器時代より直に鐵器時代に移りしかは明かならず、思ふにその大多數は、石器時代より直に、鐵器時代に移りしならん。但し南部シベリア及びこの附近に於ける靑銅器地方の、これに包含せらざること勿論なりとす。

# 第二編　モンゴル・トルコ遊牧民勃興後の中央アジア

## 第五章　古史料

未開諸國民の歷史を知るは難し、中央アジアの住民の歷史また然り。中央アジアには歷史的傳說なきにあらざれども、多くは信を措くに足らず、故にその歷史を知るには、主としてこれと壤を接する文明諸國民の記錄によらざるべからず。書契の法は中央アジアにも傳播せり、實際諸種の音標文字は諸種族の間に發明せられたりき。然れどもこの事情は却て文學的紀念物の流行範圍を制限し、且つその堙滅を助長せるものとす。故に中央アジアの歷史文學なるものは、不幸にして多く世に傳はらず、古代の史料としてはたゞ墓碑及び圓柱標あるのみ、例へば突厥(Turk)の歷史に於けるオルホン(Orkhon)の碑銘のごときこれなり。故にこの種の紀念物を除き、中央アジアの歷史を知るには、專ら支那、西部アジア及びギリシャの記錄によらざるべからず。支那は絕えず中央アジアの影響を受けたるが故に、この記錄には參考すべきもの少

からず、且つこの記事は他國の記錄に比して最も信ずべしとなす。學者のこれを以て、モンゴル・トルコ遊牧民の古代を知るべき唯一の材料となす、また怪むに足らざるのみ。たゞ支那記錄の爲めに悲むべきは、その種族及び土地を記するに原名を以てせずして、强いてこれを支那名に更め、後世の讀者をして比較研究に困難を感ぜしむるにあり。原名を知るには、或は他の記錄により、或は言語學によるの途あれども、これを以てして尙ほ往々確實なる知識を得ること能はず、意を枉げて支那名によらざるべからざることあり。

中央アジアに關する西方の記錄中、その最も古きものをアリマスペイア(Arimaspeia)とす。アリマスペイアは前第七世紀に成れるものにして、有名なるアリステアス(Aristeas)の詩篇なれども、その記事は實際中央アジアの遊行に基けるがごとし。歷史の父と稱せられたるヘロドトス(Herodotos)は、主としてこの詩篇に據りて筆を執りたりといふ。

## 第六章　支那と遊牧民との關係

支那の記錄を以て、中央アジア遊牧民の最初の運動に關する唯一の材料とするの

理由は前に述べたり。されどモンゴル・トルコ語を用ゐ、漸次その勢力を擴張してアジアの大部を震撼せし移住遊牧民の、先づ支那を苦めたるは、またその一理由たるを失はざるべし。遊牧民は黄蜂の果實に集まるが如く、富裕なる支那の國境地方に襲來し、その撃退する所となれば道を轉じて他に向へり。當時支那は遊牧民侵寇の目標なりしのみならず、またその學校なりき。遊牧民は支那にきたりて始めて政治的團結及び一致的活動の有利を學べり、若し支那帝國の實例なかりせば、中央アジアの諸國民は長へに分離して、大飛躍を試むること能はざりしならん。支那歴代の政治家は、また古より遊牧民の統治に力を注げり、支那は實に蒙古遊牧民の模範國なりき。蒙古遊牧民の世界的帝國を建設し、且つこれを統治するを得たるは、この模範國あるによるのみ。されど遊牧民はこの鴻恩に報ゆるに侵略攻撃を以てせり、而かも支那が屢々その殖民を遊牧地方に送りて、これがために新天地をひらけるは遊牧民の賜なること論なけれど素よりこれを以て遊牧民より受けたる損害に比すべからず。若し遊牧民の支那に及ぼせる他の好影響をいはゞ單調なる生活によりて、進歩を阻害せる支那國民を刺激しこれをして忠勇正義の諸德を再興せしめたるにあり。

されど支那に於ては初めたゞ間接にこの好影響を感ぜしのみ故にその君民はな

ほ有うゆる手段を以て遊牧民を遠ざけ、且つこれを化して平和的人民となすを以てその義務とせり。かくて支那の諸將は或は毒矢を放ち、或は沙漠の淸泉に毒を投じ、奸惡なる手段によりてその目的を達せんとせしが、この種の小策は功を奏せず、よりて防備を嚴にして遊牧民の侵寇に備へ、また大兵を起してこれを擊ち、遂に最後の勝利を博せり。而かもその勝利を永久にするには、遊牧民擊退若しくは城砦建築にのみよるべからず。要は遊牧民をして支那に服從しその用をなさしむるにあり、これを以て支那歷代の政治家は、遊牧民に示すに權力及び文明を以てし、その風俗を變じ、その習慣を化し、遂に結婚によりてその王朝を支那に連結するに勉めたりき。この政略は幸にして功を奏し、遊牧民の酋長はこの後漸次支那の爵位を受け、公主を娶ることを喜ぶに至れり。勿論この結婚同盟は、時に遊牧民の酋長をして支那王朝の爭に干涉し、且つ自ら王號を要求するの辭を作らしめたれど、全體に於ては支那に利益ありき。

支那歷代の政治家はまた曠野の諸種族を煽動して互に相反目せしめ、侵寇者の背後に敵を作るの策を講ぜり、これその主として、僻遠の諸種族と關係を結びし所以なり。されどこれを以て足れりとせずして、別に危險なる方法をとり、國境に少數の遊

牧民を置きてその守備に任じ、その同族と戰はしめたり。この策は半ば功を奏し、中央アジアの住民これによりて支那化するもの漸く多し。然れども國境の守備兵は屢々侵略者と同盟して支那の不利を計り、また中央に於ける政治上の權力を望めり。かくて支那の王朝にしてこの種の遊牧民の建設せるもの少からず、その原因は多年支那の統一に與りて力ありし封建制度の衰頽にあり。

支那の文明はその政府が退守的政策を棄てゝ進取的政策をとるに至るまで、永久的結果を收むること能はざりき。軍隊の前進は文明的事業の先導に過ぎず、然らざればたゞ一時的勝利を博するのみ。支那の大兵沙漠に影を匿すや、遊牧民は忽ちその巣窟を出でゝ、再び帝國の國境に現はれ刧掠殺戮を肆にせり。然れども特權を有せる支那移住者の繁華なる殖民地を曠野地方に創建するに及び、支那の主權確立して遊牧民またその地に寇せざるに至れり。

殖民地創建の計畫を鼓舞せるものは、主として曠野の政治的權力に對する希望なりとす、これ昔時罪を犯すものあれば、刑罰としてこれに課するに移住を以てせることありしがためなり。支那古代の殖民地中最も成効せるものは、崑崙山の北方傾斜地に於ける沃地に沿ひて建設せられたるものにして、その動機は貿易を安全にし、且

つタリム河盆地に於ける沃土の住民と直接の交通を開くにありて。然れども商業上の理由は支那國民をして、裏海沿岸に進めましたる唯一の動機にあらず、支那國民はこの地方に於てもまたその主權を擴張して遊牧民を鎭壓せんことを望めり。近時ロシアのシベリアよりトルキスタンに出で、ペルシア及びアフガニスタンの國境に至りて、始めてその前進を止むるはまたこの理由による、蓋し完全に遊牧民を征服するの道はこれを措いて他にあらざるなり。

## 第七章　中央アジアに於ける國民性の混合

遊牧の發達は中央アジアに於いて國民性の混合を容易にせること、その言語よくこれを證明せり。その初めに當りてや、遊牧生活の影響を受けて、アーリア語西部に流行せしが、後代にはモンゴル語及びフィノ・ウグリ語中央アジアに行はれ、シベリア及びヨーロッパの方面に傳播しぬ。諸國民の相混和せる太平原の特徴は、歴史上の事實に反映し一時無事を得たる諸民族も、遂にその住地を奪はれて他の國民性に混和し、次いでこれと共にまた他の國民性に併呑せらるゝに至れり。平原の諸種族が皆かくの如く小は大に呑まれ弱は强に併せられ、遂に雜多の異分子より成る大國民性を

形成して、世界の大部を戰慄せしめたるものを出せり。されどこれ等の國民は忽然として現はれ、忽然として消え、永く史上にその跡を留めず、この結果中央アジアの住民は、言語及び人種の上に於いて大同小異となり、たゞ文明の程度及び曠野地方の邊陲に於ける他種族との混合とによりて、新たに差別を生じたるを認むるを得るのみ。この種の種族的混合は、アーリア遊牧民の蒙古遊牧民に結合せる所、また後年イラン農民のトルキスタンの牧地に勢力を移植したる所に、始めて行はれたりき。この時アーリア種は、言語の上よりいへばその根據を失ひたること多しと雖ども、性情の上よりいへば蒙古種に感化を及ぼせること少からず。長顱の古種族は屢々シベリアの蒙古種と混合せるも、蒙古の遊牧民とチベット及び印度の住民との間に、言語の一致點あるは、この種族混合より生ぜる結果にあらずして、却つて古代に關係ありしを證するものとす。この關係は今日詳ならざれども、その痕跡は天及び天神の名に存す、天はポリネシア(Polynesia)島にてこれをタンガロア(Tangaroa)といひ、支那のチェン(Tien)ブレー(Burey)語のテングリ(Tengri)アルタイ語のテンゲレ(Tengere)に似たり。これ明かにマライ(Malay)種族の南部アジアより傳へたるものとす。

# 第八章　匈奴の興亡

始めて鞏固なる團體を作り、數百年間東部アジアを苦めたる蒙古遊牧民は、支那の古史に從へば夏殷時代の獯鬻、周時代の玁狁、秦漢時代の匈奴（Hiung Nu）なり、而してこの名が、後年ヨーロッパを蹂躙せるフン（Hun）族に似たることは、長く學者の注意する所なりき。始めて中央アジアの歴史を研究せるジョセフ・ド・ギース（Joseph de Guignes）氏は、フンを以て匈奴の同族或は後裔なるべしとせしが、近時フリードリッヒ・ヒルト（Friedrich Hirth）氏はこの推測の誤らざるを證せり。故に古代の匈奴を以て、フンの正名とするもまた妨げざるのみならず、印度古詩のフーナ（Hûna）アヹスタ（Avesta）のフナヺ（Hunavô）ギリシア記録のフノイ（Funoi）及びウノイ（Unoi）は、皆この種族をさせるものなり。而して言語學上よりいへば、この種族は最も後代のトルコ人に近し。

支那の傳說によれば、前一二〇〇年の頃夏后氏の裔淳維、北方に奔りて遊牧民を統一し支那を模範として近世の蒙古地方に匈奴王國を創建したりと。これより先き遊牧民の一部支那に寇せしも、その影響の見るべきものなかりしが、匈奴王國一たび蒙古地方に創建せられ、周朝また支那に起りて封建制度實行せらるゝに及び形勢一

變して支那の地位危きを致せり。周朝の祖武王は匈奴族に對して從來の友誼的關係を更めず、當時匈奴族は新興の支那帝國を恐れ、方物を献じてその歡心を買ふに努めしが、一度その權威衰ふるを見るに及び倍舊の勢を以てその地に寇し、前九一〇年北部山西地方を蹂躪せり。この後周の宣王親ら兵を率ゐて山西を討ち、その地に勢力を振へる匈奴族を驅逐せしも、遂に全くその侵寇を止むること能はず、多年この種の戰爭を反覆せり。

前七〇〇年の頃匈奴族は山東に進み、次いで前六五〇年北直隷を脅し、絶えず支那を攻撃せり。當時支那に於いては周末群雄四方に割據し、一致してその敵に當ること能はざりしも、その後秦の始皇帝(前二四六―二一〇年)再び天下を統一し、南部支那を征服して大にその權力を擴張するに及び、オルドス(Ordos)の匈奴族を討ちて黃河の北方に逐ひ、軍隊的殖民地を闢きて新領土を防禦し、長城を築きて支那本部を保護せり。而して長城の一部は已に燕趙諸國の國境にありしが、これを連結して黃海の濱より甘肅に擴張せるは、實に始皇帝の世に始まる。若し支那にしてこれを修築し、意をその防守に注がば、匈奴族の侵寇を防ぐこと容易なりしならん。長城は初め多少その目的を達せり、匈奴の鋒を轉じて他に向へるは、實にこの建築その進路を阻め

るによる。然れども始皇帝の死後天下再び亂れ、群雄再び起るに及びてその計畫忽ち畫餅に歸せり。

當時匈奴族は勇敢なる首領を得て、頓にその勢力を擴張せり、されど始皇帝は書を燔きて、殆ど古代の文學を滅ぼせるが故に、匈奴族に關する最初の記錄にして、比較的正確なるものはこれをその死後に求めざるべからず。この時に當りて支那の君民は、遊牧民の勢力擴張を見て甚だこれを憂ひたりき。匈奴帝國の興隆は、端を冒頓の時代に發す冒頓の父頭曼は、已にその權力を北部蒙古より甘肅に及ぼせしが、冒頓その繼承權を奪はんとしたるを恨み、部下の兵士の助力によりてその父を殺し、匈奴帝國の統治者としてその國民の勇氣を恢復せり。當時匈奴と壤を接するもの東には東胡あり、南西には月氏あり。前者はツングス(Tungus)種族にして、コレア(Korea)族と密接なる關係を有し、有力なる王國を創建して自ら匈奴に勝れりとし、その間の中立地を得んことを要求せり。後者はまたチベット種族の遊牧民にして、祁連、燉煌の間即ち甘肅の北方に住し、東西商業の連鎖たり、これ古代のイッセドン(Issedon)人ならんとの說あり。東胡王は冒頓の陽に服從せるを見て、またこれに備へず、前二〇九年不意にその攻擊する所となりて潰散し、近世の滿洲(Manchuria)の高原に遁れ、餘衆は烏

桓鮮卑の二部に分れたり。

冐頓は東胡を逐ひてその領土を奪ひしも、東には漫々たる大海ありてその兵を進むべからず、こゝに於いて鋒を轉じて西に向ひ、甘肅北方の月氏を撃つ、蓋しこの方面にはなほ運動の餘地存すればなり。前一七七年月氏族は匈奴族の進軍を見てタリム河の盆地に退き次いで前一七〇年冐頓死するに及び、その舊領土恢復を圖る。然れども戰利あらずして國民分離し、その一部は南山の南に移りて小月氏となり、他の一部即ち大月氏は西に向ひ、天山を越えてスキタイ遊牧民の古逐鹿場たるヨーロッパアジア間の牧地に遁れ、牧畜を業とするイラン種の塞種を逐ひて住地をイシク・クル湖（Issik-kul）邊にトせり、而して塞種はこの時フェルガナ地方に奔りき。この間に匈奴族は北西支那及び東部シベリアの一部を略し、中央亞細亞に於ける未知の遊牧種族征服の政畧を取れり。匈奴族の他種族を征服するや、その住地を奪はずまた貢を徵せず、その婦女を妻妾となし、その壯丁を兵士となして、これを匈奴化するに勉めたりき。匈奴族はもと牧畜、狩獵及び耕作によりて生活せる人民なれども、古より武を尚び、老衰して戰に堪へざるものを蔑視し、一度敵を殺せることなきものはこれを一箇の男子と認めず。一種の戰術は夙にその間に發達し、その戰士は或は馬に跨りて敵

を射、或は佯りて走り、或は矢を亂射して追撃者を斃すの術をも知れり、而して軍隊を左右兩翼に分つの法もまた古より存せし所とす。この軍隊制度は平時にても行はれ、その首領たる單于は中央を統べ、二名の屠耆即ち左右賢王は東西を統ぶ、この配置は實にアジアの地勢に應ぜるものにして、後代遊牧民の大帝國またこれを採用せり。單于は政府を統べ、屠耆及び他の官に任ずるものは悉くその一族なり、他家族の政府にあるものに至ては、その數少かりき。

冒頓の死後匈奴族は、大にその勢力を擴張し、月氏と戰ひて完全にこれに勝てり。これより先き毛髮美なる中央アジアの遊牧民烏孫は、月氏族のためにその住地たる甘肅を逐はれ、東に奔りて匈奴に賴りしが、その王昆莫長ずるに及んで、冒頓の援を得て西に移り遂に月氏の背後に迫まり、之をしてイシク・クル湖畔を去らざる可らざるに至らしめたり。匈奴族はこの種の征服によりて、大にモンゴリア種族の勢力圏を擴張せしが、これがために最も苦痛を感ぜるものは支那なりき。當時西部の山地に住せしチベット遊牧民は、匈奴族と同盟して絶えず支那に寇せり。支那の君民之を憂ひ屢々兵を擧げてこれを討ちしも、その軍隊出沒自在にして遂にその侵寇を止むるに由なし、これを以て支那にして若し長へにその侵寇を免かれんと欲せば、甘肅より

タリム河の盆地に至る一帶の地を占領して、南部の遊牧民と北部の遊牧民との連絡を絶ち、同時に匈奴軍の根據地を奪ひて、ゴビ沙漠の南に至らざるべからず、然らば西部の貿易また支那の掌中に歸すべし。漢の武帝(前一四〇―八七年)こゝに見る所あり、乃ち烏孫と同盟して匈奴の背後を脅し、遂にこれを北部蒙古に逐ひて始めて西進の地を作り、支那の外交史に新紀元を開けり、實に前一二〇年とす。

匈奴帝國は依然獨立し、且つその權力を西方に擴張せるも已に昔日の隆盛を失ひ、外には敵兵の襲來あり、內には王位の爭あり、國內の種族これがために分裂して五十年の頃南北兩帝國を生じ、南部は支那の主權を承認し、北部はなほその獨立を維持せり。されど匈奴帝國の滅亡は一時の成功を以て支ふべからざるものあり、南匈奴帝國は支那の煽動によりて北匈奴帝國に反對し、周圍の他の遊牧民また相謀りてこれを攻擊せしかば、北匈奴は八四年を以て遂に滅亡せり。この時北匈奴帝國を攻擊せるものには丁零の如きシベリャの諸種族あり、就中匈奴の讐敵たる鮮卑族はこの擧に與りて最も力ありき。匈奴族の一部は西方に遁れ、他の一部は四方に散じ或は當時蒙古の大部を領せし鮮卑の併呑する所となれり。南匈奴帝國は支那に對して或は服從し、或は反抗し或はその僭主を助けて北匈奴帝國の滅亡後なほその命脈を維

持せしも、一四二年以後遂に滅亡せり。支那文明の感化を受けたる匈奴族は漸次政治上の權力を得、その子孫にして一時支那の帝位に登りしものあり、また兩晋の際支那の分裂するやその一部に君臨せしものあり、然れどもこれ等は已に遊牧民の君主にあらず、その思想及び行爲に於て純然たる支那の帝王なり。

# 第九章　アレクサンドル前後の中央アジア

中央アジア西部の遊牧民は東部の遊牧民に比すれば古き歴史を有し、遊牧民の大移住また始めて西部に起りき。匈奴帝國の創建を去る數千年の昔アーリア種の移住民はイラン及び印度を占領せり。然れどもイランの移住民はその進路を遮ぎられてバビロニアの低地に至ること能はず、乃ちその新住地に留まりて土民並びにチグリス、エウフラト兩河畔の文明の感化を受け、漸次定住民の生活に移れり。されど俄かにその遊牧生活の勇氣を失はず、土民と相混合して遊牧民の侵寇に當り、西部アジアの保護者となりき。遊牧民これよりその進路を遮ぎられ、イランの混合民また西部アジアに進まず、諸國民の大運動一時こゝに終を告ぐ。メヂャ人及びペルシア人の西部アジアの全部にその權力を振ふや、已に西方文明の感化を受けて、その征服

せる、諸國にイランの特徴を與ふること能はざりき。

アッシリア、バビロニアの記錄は、西部アジアのアーリア遊牧民に關して何等の記する所なし、支那の記錄また然り。當時諸國民の間に無數の戰爭ありしは疑を容れず、されどこれ印度及びイラン移住の主もなる原因にあらざるが如し。蓋し短顱種族の遊牧民、中央アジアに來りて漸次その影響を諸種族に及ぼし、時恰かも東方に進み來れるスキタイ遊牧民の一部を併呑し、一部を西方に驅逐してより諸種族の間に動搖生じたればなり。この結果ドナウ河北にありて牧畜を業とせし、トラキヤ(Thrakia)種族のキムメリア(Cimmeria)人は、前七〇〇年の頃小アジアを侵略し、スキタイ人(スコロタ人)これに次ぎて西方に進み、また、サルマチア人の擊退する所となれり。この運動の第一原因は匈奴の西進なるが如し、蓋し匈奴はこれより先き一帝國を創建し、東部及び西部にその勢力を擴張したればなり。キムメリヤ人は小アジア及びアルメニアよりアッシリアを脅し、これによりて東方より進みきたれるメヂア人と接觸せり。

西部アジアの遊牧民に關する確實なる歷史は、メド・ペルシア帝國の創建に端を發す。この時代にはイランの定住民と遊牧民との間に戰爭あり、ギリシアの歷史家は當時のペルシアの狀態を誤解し、この戰爭の原因を以てペルシア國民の騎馬遊牧民

の土地に對する欲望に歸せり。されどペルシアは實際攻勢をとらず、前五三〇年のキロス(Cyrus)のマッサゲタ(Massagetae)遠征、前五一五年のダリオス(Darius)のスキタイ遠征は、たゞ國內の遊牧民を討ち、これによりてその國境を安全にせんとせるのみ、殊にダリオスの遠征は側面攻撃によりて遊牧民の退路を絕ち、これを征服するを以てその目的としたりき。されどペルシア帝國はこの大計畫をなすこと能はずして亡べり、思ふにこの種の大計畫は支那國民の頑强を以て、始めて成し得べきものなるべし。

ダリオスの大計畫は、ペルシア人のためにドナウ河の下流を安全にせしも、死後またその志を繼ぎて事に當れるものなし。然るにスキタイ族はスパルタ(Sparta)人の小アジア征服に意あるを見、これと氣脈を通じてその志を成さんとし、道をカウカッス地峽にとりてペルシアを攻擊せり。

東部イランの定住民は、殖民制度によりて遊牧民の侵寇を防がんとせしが如し、而して遊牧民の大多數がイラン種族なるの一事は頗るこの運動を容易にせり。昔時イランの文明を有せる諸國バクトリア(Bactoria)及びソグヂアナ(Sogdiana)地方に發達し、後年征服によりてペルシアに倂せられき。バクトリアとはオクス河と、パロパミ

ソス(Paropamisos)山脈との間に横はる地方の古名にして、ギリシアの史家クテシアス氏によれば、バクトリアはキロスが征服したる東方アジア中最初の國なりといひ、またベヒスタン(Behistan)の碑銘によれば、バクトリアは前六世紀頃既にダリオスのペルシア大帝國中の一州(Satrap)たりきといふ。ソグヂアナとは古代のギリシヤ人がポリチメトス(Polytimetos)河と呼び今人がザラフシアン(Zarafshan)と稱し原名をソグドといふ河名より出でたる地名にして、ボハラ(Bokhara)及びサマルカンド(Samarkand)をも包括し、マルギアナ(Margiana)、ホラズミア(Khorazmia)と共にキロスの征服する所となれり。

然るにその後約二世紀を經てペルシア帝國は、遂にマケドニア(Macedonia)王アレクサンドル(Alexandoros)の異常なる勢力と非凡なる才能とに敵せずして顛覆し、これ等中央アジアの地方もまたギリシア人の手中に歸したり。初めアレクサンドルは前三三四年地中海の東岸より進んで、前三三三年イッソス(Issos)にペルシア王ダリオス三世の軍を破り、次いで前三三一年ガウガメラ(Gougamela)に再びダリオスを撃破しぬ。是に於いてダリオス遠く東方に逃れバクトリアに入らんとせしに、アレクサンドルはペルセポリス(Persepolis)及びパサルガデー(Pasargadae)を掠略し、更に進んで

ダリオスの逃避したるエクバタナ(Ecbatana)に迫まらんとす。時にバクトリアの知州にして、またエクバタナの司令官たるベッソス(Bessos)叛きてダリオスを弑し、バクトリアに逃れ自立してアルタクセルクセス(Artaxerxes)四世と稱せしが、アレクサンドルは先づ東部ペルシアを略し、次いで前三二九年ヒンヅ・クシ(Hindu-Kush)山脈を越えてバクトリアの平原に出で、ドラプサカ〔(Drapsaca)今のアンダラブ(Andarab)〕アオルノス〔(Aornos)今のゴリ(Gori)又はフルム(Khulum)〕を取り、バクトラ(Bactra)を陥れしかば、ベッソスは殘兵を率ゐオクスス河を渡りて逃れしも、その部將スピタメネス(Spitamenes)の捕ふる所となりてマケドニア軍に送られ、アレクサンドルはこれをエクバタナに送りて礫殺せり。

アレクサンドル更に進んで、ソグヂアナの首府マラカンダ(Marakanda)即ち今のサマルカンドを襲うてこれを占領し、次いでヤクサルト河畔に達せしが、王はこれを以てタナイス(Tanais)河即ち今のドン(Don)河と思惟せりといふ。而してアレクサンドルの達したるヤクサルト河畔の地は今のホーゼンド(Khojend)附近なりしが如し。この時王がこの地方に新市府を建設せんとの計畫は、ソグヂアナ人及びバクトリア人の反亂の爲めに妨げられしが、曾々スキタイ族の大部隊ヤクサルトの對岸に現はれ、

スピタメネスもまた叛きて、マラカンダのギリシア守兵を攻圍しつゝありとの報に接し、王はスピタメネスに對して優勢なる一支隊を派し、自ら一軍を率ゐてヤクサルテス河の左岸に進み、十七日間にして周圍六十スタヂア(Stadia)即ち約三里の外壁を有する一市府を建設し、これをアレクサンドリア(Alexandria)と名け、次いで舟筏を作りて全軍を渡しスキタイ族を撃破せり。然るにマラカンダに向へる一隊は、スピタメネスの爲めにポリチメトス(Polytimetas)河の平野に於いて全滅せられしかば、王は自らホーカンドに向つて急進せしに、スピタメネスはバクトリアに逃れ、王はこれを追窮せしが、遂に及ぶ能はずして軍を旋へしぬ。

かくてアレクサンドルは前三二九年より翌年に亘れる冬期間ザリアスパに滯陣せしが、この間新兵一萬九千をギリシアより得て、春に至りマルギアナ(Margiana)を征服せり。ザリアスパは蓋しグリゴリエフ(Grigorieff)の考定せるがごとく、ホラズム(Khorasm)地方に於けるバイカンド(Baykand)の古市ヘザラスプ(Hezarasp)と同一ならん。されどペトラ・オクシアナ(Petra Oxiana)は蓋し今のメシェッド(Meshed)の東北方なるカラチ・ナヂリ(Kalati Nadiri)ならん]城獨り降らず、ソグド人アリマゼス(Arimazes)を將として固守せしが、幾許もなくして城遂に陷り、マリマゼスはその貴族と共に礫殺せられ

き。次いてアレクサンドルは、バクトリアよりマラカンダに進み、これより其附近の諸地方に兵を出せしが、この間スピタメネスは遂に一遊族の爲めに殺され、その頭はアレクサンドルに送られたりといふ。こゝに於いて王はソグヂアナの全部を平げ、ナウタカ(Nautaka)に退軍して冬期をこゝに過せしが、前三二七年に至り歩兵一萬、騎兵三千を留めてバクトリアを鎭せしめ、自ら大軍を率ゐて印度征服の途に上りぬ。

## 第十章　バクトリア及びパルチア

アレクサンドルの末年バクトリア及びソグヂアナは、其の將アミンタス(Amyntas)の管治する所たりしが、前三二三年王死してその大帝國分裂するや、アミンタスもまたエリメウス(Elrmeus)のフィリッポス(Philippos)の爲めにその職を奪はれ、歳餘にしてフィリッポスのパルチヤ知縣に轉ずるに及び、スタサノル(Stasanor)これに代はりしが、前三〇一年に至りてセレウコス(Seleucos)に降れり。

これより先きアレクサンドルの部將セレウコス・ニカトル(Seleucos Nicator)は、前三二七年を以てシリア及びバビロニア等の鎭將に任ぜられ、王の死後アンチゴノス(Antigonos)の扶助を得てスシアナ(Susiana)を併合せしが前三一六年遂にアンチゴノスと

戰ひ敗れてエジプトに逃れ、前三一二年に至りて再びバビロンに入る、これをセレウコス朝の紀元元年となす。かくてセレウコスは漸次その版圖を擴張してオクスス河及び印度河に至り、前三〇六年始めて王と稱しぬ。翌年セレウコスは印度の摩揭陀(Maghada)王栴陀羅掘多(Chandra Gupta)を伐て、アレクサンドルの領土を恢復せんと圖りしが敗れて和を講じ、却て印度河とパロパミソス(Paropamisos)山系との間を割讓せり。

前二八〇年セレウコスその臣下の弑する所となり、アンチオコス(Antiochos)一世及びアンチオコス二世相次いで立ちしが、セレウコスの死後東北諸州頻りに動搖し、遂に前二五六年に至りバクトリアの知州ヂオドトス(Diodotos)一世叛きて王と稱し、グレコ・バクトリア(Graeco Bactria)王國を創む、支那に所謂大夏國これなり、大夏とは蓋しその人民の名稱トハリ(Tokhali)の音譯ならん。會〻スキタイ族の一派ダヘー(Dahae)部の酋長アルサケス(Arsaces)一世も、またその弟チリダテス(Tiridates)と共にペルシアの北方に崛起して、パルチアの知州アンドラゴラス(Andragoras)を倒してこれに據り、前二五〇年を以てパルチア王國を建つ、支那に所謂安息國これなり、安息とは蓋しアルサケスの轉音ならん。然るにセレウコス朝はこの時西方の攻伐に忙はしく、爲めに

東北邊土の紛擾を顧慮するの遑なかりしが、後セレウコス二世立つに及んて、前二三七年兵を出してパルチアを伐ちしに、バクトリア王ヂオドトス一世これを援けて、共にパルチア王アルサケス二世と戰ひ、これを破りてスキチアに走らせ、セレウコス二世をしてバクトリアの獨立を認容せしめたり。既にしてヂオドトス一世死し、その子ヂオドトス二世バクトリアに君臨するや、パルチア王アルサケス二世はバクトリア王に說きてセレウコス朝との同盟を解かしめ、共に聯合してセレウコス朝の軍を破り、パルチアの獨立を確立しぬ。

バクトリアはヂオドトス二世の死後前二二二年の頃エウチデモス(Euthydemos)の簒ふ所となる、エウチデモスはもと小アジアのマグネシア(Magnesia)に生まれたるギリシア人なり。時にセレウコス朝はアンチオコス三世(大王)前二二三年を以て位に即き、頻りにエジプトその他の西方諸國と戰ひしが、後鋒を東方に轉じてパルチアを伐てメヂアを復し、前二一三年その都ヘカトムピロス(Hekatompylos)を陷れ、パルチア王アルサケス三世を逐うてヒルカニアに入りしも、和を媾じてパルチア及びヒルカニアに於けるパルチア王の主權を認容し、更にバクトリアを伐てエウチデモスをアリオス(Arios)即ち今のヘリ・ルード(Heri-Rud)河畔に破りしが、前二〇六年に至り和を媾

じて其の女をバクトリア王の太子デメトリオス(Demetrios)に嫁するを約し、且つバクトリア及びソグヂアナ州に於けるバクトリア王の主權を認容しぬ。次いでアンチオコス三世は更に進んでヒンドゥ・クシ山を越えアフガニスタンに入り、その王ソファガセノス(Sophagasenos)と舊約を溫めて兵を旋し、アラコシア(Arakosia)ドランギアナ(Drangiana)カルマニア(Karmania)を經、更に海を渡りてペルシア灣の西岸にアラビアの海賊を擊破し、前二〇五年を以て國に歸れり。然るに後幾許ならず、アンチオコス三世はローマと釁を生じて大に敗れ、これよりセレウコス朝は遂にシリアの一王國に縮少して、國勢全く衰頹しぬ。

バクトリアはエウチデモスのネデメトリオス、前二〇〇年の頃を以て位に即く、王は太子たりし時より頻りに南征して、パロパミソス山南の地即ち今のカンダハル及びカブール地方を畧せしが、即位の後もまた兵を出してアフガニスタンの大部を服し、更に印度に入てパンジアブの一部を取れり。然るに前一八〇年の頃エウクラチデス(Eucratides)、王の南征に乘じて叛きしかば、王乃ち國に歸りてこれを伐ちしも敗れて退き、パロパミソスの南方を保ち、エウクラチ・デスは北方に據る。次いでデメトリオスの死後エウクラチデス遂に悉く山南の地を併せ更に印度に入てパンジアブを

畧せしが北境は却てパルチアの爲めに蠶食せられたり。

この間パルチアは國勢振はず、西はカスピ關、シルダル(Sirdar)越、東はアリア(Aria)、ヘラット(Herat)及びマルギアナ(Margiana)、メルヴ(Merv)の間に限られたる、狹少の地域を保つに過ぎざりしが、アルサケス三世の後プリアパチオス(Priapatios)（アルサケス四世）フラアテス(Phrates)一世（アルサケス五世）を經て、前一七四年の頃ミトリダテス(Mithridates)一世の位に即くに及んで國勢頓に興隆す。時にバクトリアはアフガニスタン及び北西印度の經營に忙はしく、西方を顧みるの暇なきに乘じ、ミトリダテス一世は兵を境上に出してこれを蠶食し、その二州を奪ひしが、更に鋒を西に轉じてシリアを侵し、メヂア、スシアナ(Susiana)ペルシア及びバビロニアを略して、版圖をエウフラテスの下流に擴張せり。前一六〇年の頃バクトリア王エウクラチデスの印度より凱旋するや、その子ヘリオクレス(Heliocles)これを途に要撃して自立せしが、これよりバクトリアの國勢漸く傾き加ふるに北は塞種及び月氏の侵寇を被ふり、西南は地をパルチアに失ひその疆域日に蹙まる。是に於いてバクトリアは援をシリアに求め、共に連合してパルチアを挾撃せんとし、シリア王デメトリオス二世これに應じて、前一四〇年パルチアに侵入せしに、ミトリダテス迎へ擊てこれを破り、デメトリオスを虜にして西方アジアの覇

權を握れり。時にバクトリアはその領土全く瓦解し、次いで尙ほカブール、カンダハル及びその他の地方にギリシャ人の小王國勃興し、就中前一四〇年頃カブールに都せるミリンダ(Milinda)即ちメナンデル(Menander)のごときは、その版圖一時北はパルパミソス山脈より南は印度洋に至り、西はヘラット附近より東は恒河(Ganga)の支流ジャムナ(Jumna)河に達してその勢强盛なりしが前八〇年に至り悉く大月氏の併合する所となれり。

## 第十一章　大月氏と嚈噠

月氏は蓋しチベット種の一派にして、初め甘肅地方より天山の間に據りてその勢頗る强大なりしが、匈奴に冒頓單于出づるに及んでその擊破する所となれり、次いで老上單于の爲めにその王を攻殺せられ、餘衆は王后を奉じて遠く西に遁走し、當時パミールの東部地方に據れる塞種即ちギリシア人の所謂サカ(Saka)族を逐うてその地を占領せしかば、塞種の一部はズンガリア(Zungaria)に逃れ、その大部はイリ(Ili)河畔に止まりてキグル(Uighur)族に混じ、他の一部はヤルカンド(Yarkand)河上流の平野に赴き、更に他の一部はカラコルム(Karakorm)を越えて印度の東北部に侵入し、罽賓即ちセイ

スタン及びカシミラの一部に據る。而して月氏もまた後幾許ならず、烏孫王昆莫の破る所となりて南走せり。

烏孫はもと月氏と共に甘肅の北西に居りしが、月氏攻めてその王難兜靡を殺してその地を奪ひしかば、烏孫の人民故王の幼兒昆莫を奉じて亡げて匈奴に走り投ず、單于これを納れて昆莫を愛養し、壯なるに及んでその父の民衆を以てこれに與へて兵に將たらしめ數々功あり。時に月氏既に匈奴に破られて塞種の地に據る、昆莫乃ち父の怨を報ぜんと欲し單于の援を請ひ、遂に月氏を攻めてこれを破り、その地を奪うてこゝに烏孫國を再建しぬ。こゝに於いて月氏はまた西走してオクス河の北に徙り、太子を立てゝ王となし、次いで南の方バクトリアを臣服してこゝに大月氏國を建つ、實に前一二八年なり。

これより先き漢の武帝は匈奴の漢に降れるものより月氏の匈奴を恨めるを聞き、使を通じて與に匈奴を挾擊せんと欲し、張騫を月氏に遣はす。前一三九年張騫その從者百餘人を發して匈奴の中を經、その捕ふる所となりて抑留せらるゝこと十餘歲遂にその部下と亡げて月氏に向ひ、西走數十日、大宛（フェルガナ地方）康居（ヤクサルトス河北及びキルギス曠原の地）を經て遂に大月氏に至り、漢と同盟して匈奴を挾擊せんことを說きしも、時に大月氏

は既にバクトリアを臣服し、地肥饒に寇少なく逸樂に安んじ、また漢と遠く隔れるを以て同盟して復讐するの念なし。是に於いて張騫大月氏の要領を得る能はず、バクトリアに赴き留まること歳餘、漢に還らとしてまた匈奴の得る所となりしが、會々匈奴の内訌に乘じ遁れ還る、初め張騫行く時同行するもの百餘人、十三歳を經て還るを得たるもの唯二人のみ、時に前一二六年なり。

この間印度の東北部に徙れる塞種の一部は漸く勢力を恢復し、前一〇〇年の頃に至り、その王マウエス(Maues)パンジアブに侵入してギリシア人の諸王國を併せ、遂にインドス河の流域を略してその勢力强盛に赴き、マウエスの後アゼス(Azes)、アジリセス(Azilises)、ヴノネス(Vonones)、スパリリセス(Spalirises)、スパラホレス(Spalahores)、スパリリス(Spaliris)、スパラガダメス(Spalagadames)、及びアゼスの將アスヴルマ(Asvarma)等、相次いでサカステネ(Sakastene)即ちセイスタン、カンダハル、シンド及びパンジアブに分立せり、而してアゼス及びアジリリセスは前七〇年頃タクシアシラ(Taxasila)に據れりといふ。

是より先きパルチアはミトリダテス一世、帝國の基を鞏固ならしめてより國勢頓に興隆し、前一三六年その子フラアテス二世立ちて、シリア王アンチオコス三世シデ

テス(Sidetes)の來り侵せるを迎へてこれを撃殺し、次いで塞種の侵寇を却け一旦マルギアナ(Margiana)を恢復せしが、後幾許ならずその破る所となりて戰歿し、前一二七年その叔父アルタバノス(Altabanos)代はり立ちしも、またバクトリアの塞種と戰て傷き死し、前一二四年その子ミトリダテス二世大王位に即くや、塞種を撃破して東北境を綏んぜしが、後アルメニアの王チグラネス(Tigranes)と釁を生じて西境の地を失へり。時にシリアは東はパルチアの侵寇を被ふり、北は地をアルメニアに失ひ、西はローマの壓迫を受けて國勢衰頽し、遂に前六五年に至りてローマの併合する所となる、是に於いてセレウコス朝亡び、パルチア、ローマの交渉これより起る。パルチアはミトリダテス二世の後數世にしてオロデス(Orodes)一世に至り、前四〇年その子パコロス(Pakoros)を遣はしてシリア、フェニキア、パレスチナを略し、更に小アジアに侵入してカリア(Caria)に至る南方の海岸を占領せしも、後幾許ならずして悉くこれを失ひ、エウフラト河以東に退却せり。會ゝ大月氏に丘就却王出でゝ國勢頓に興隆するに及び、パルチアは東境また一强敵を生ずるに至りぬ。

大月氏は既に塞種及びバクトリアのギリシア人を驅逐してバルク(Balkh)、クンヅーズ(Kundux)、ヒサル(Hisar)、ボロル(Bolor)、ワカン(Wakhan)及びバダクシアン(Badakshan)

を包括せるトハリスタン (Tokhalistan) を占領せしが、後その版圖は五翕侯の分領する所となり、就中貴霜(クシアナ)(Kushana)翕侯丘就却(コズロ、カドフイセス)(Kuzulo Kadphises)最も强盛にして、前三〇年の頃攻めて四翕侯を滅ぼし、貴霜王(Kashana-Yavugo)と稱して西はパルチアを侵し、南はパロパミソスを越えて、當時パルチア人と塞種と分領せるカブールの地を取り、罽賓の塞種を滅ぼし、また前二五年の頃北印度に於ける最後のギリシア王ヘルマイオス(Hermios)を擊破してその地を奪ひ、前一〇年の頃八十歲にして死し、その子閻膏珍嗣ぐ、蓋しフエモ・カドフイセス(Hooemo Kadphises)王なり。 王また頻りにその領土を擴張して悉く北西印度を併せ、その後嗣迦膩色迦(Kanishka)フシカ(Hushka)或はフヸシカ(Huvishka)ジュシカ(Jushka)に至りて益々强大となれり。 而して迦膩色迦王もまたパルチアを破り、更に南方諸國を併呑せしかば、大月氏の勢威はこの時を以て絶頂に達し、その版圖北はカブリスタン(Kabulistan)より南はマツラ (Mathura) に達して、罽賓、カブール、パンジアブ、ラジァプタナ(Rajaptana)、グジエラト(Gujerat)、シンド等を掩有しぬ。

これより先き中印度にその勢を失へる佛敎は、北西印度の方面に布敎傳道の途を開きてギリシア人の諸王國に入り、次いで塞種の諸王もまたこれを尊崇せしが、今や大月氏の興隆に伴ひて遂に北方佛敎の大成を見るに至れり。 初め大月氏は丘就却

王以來ザラッストラ教即ち拜火教の信者なりしが、北西印度を併するに及んで佛教に歸依し、次いで迦膩色迦王に至り中印度を侵伐して佛鉢を得、また高僧阿濕縛窶沙(Asuvaghosha)即ち馬鳴を伴ひ歸りてより佛敎を篤信し、八〇年の頃闍爛達羅(Jâlandhara)(パンジアブの一部ジアランダル)に上座部の高僧五百人を會して結集を催す、波栗濕縛(Pârs'va)即ち脅尊者及び伐蘇密多羅(Vasumitra)即ち世友これが頭領たり、馬鳴及び達摩多羅(Dharmatr-ata)即ち法救等の高僧扶けてこれを大成せり。而してこれより先き阿輸迦王の第三結集以後發達組織せられし佛敎上座の正統宗義は、實に是に至りて完全に編成せられ、北方佛敎文學の基礎こゝに始めて確立す、而かもこれ等の佛典は皆梵語(Sanskrit)を以て記錄せられたるを以て、梵語は遂に北方佛敎の聖語となり、セイロン(Ceylon)及び中印度に行はれたる南方佛敎の聖語パーリ語(Pali)と相對するに至りぬ。而して佛敎が大月氏より支那に入りたるは、六七年即ち漢の明帝永平十年にして、實に大月氏は迦膩色迦王治世の初めに當れり。

かくて大月氏は第一二世紀の頃中央アジアに於ける最も優勢なる帝國としてローマ人の知る所となり、トラヤヌス(Trajanus)及びハドリアヌス(Hadrianus)二帝の世、ペルシヤに對してローマと同盟せんが爲めに使を遣はしたることあり。また支那の

記錄によれば、九八年後漢の將班超支那土耳古斯坦及び中央アジアの諸國を服屬するや、大月氏との交渉を惹起し、次いで大月氏王は漢に歳貢を約したりといふ。されど大月氏もまた永くその勢力を維持する能はずして第三世紀の末に及んでパロパミッス山南の大部を失ひ次いでカシミルをも奪はれしが、四三〇年の頃に至り嚈噠(Ephthal) 即ち白フン(Hun)族の爲めにバクトリアより驅逐せられたりき。傳ふる所によれば、大月氏最終の王キトロ(Kitolo)即ち寄多羅のカンダハルを伐つや、嚈噠族の侵寇を被ふりて兵を旋せしも遂にその領土を失ひ、その子のカンダハルに殘留せるもの更にペシアワル(Peshawar)に據りてシアー・カトル(Shah Kator)と稱したりといふ。而して大月氏はその後數十年間尚ほ餘喘を保ち、五七八年に至りて始めて亡べり。

嚈噠(エフタル)(Ephthal)即ち白フン族は、東西の史上に或はナフタル(Naphthaltes)或はハヤチラ(Hayathila)或はイエタ(Yetha)即ち悒怛等の異名を以て知られたる一大部族にして、蓋し月氏と同種なり、或は小月氏の後ともいふ。もと甘肅の西北方に居り、後于闐の西方を占領せしが、第一世紀の頃より西南方に徙り、第四世紀の頃柔然に役屬し、後更に西方に移住してペルシアの東北境に達し、四二五年の頃トランス・オクサナに侵入せしが、この頃より漸次勢力を得て東南にその領土を擴張し、カシミル、ハラシアル、于闐等

を包括する大帝國を建設するに至れり。かくて嚈噠は大月氏を逐うてその故土に據ること百三十年(四二五―五五七年)、近世のヒヷ(Khiva)に都して、東は婚を柔然に通じ、拓跋魏と往來し、高車と戰ひ、南は四二〇年以後ペルシアのササン朝(Sassanidae)と接觸して一時中央アジアに於ける一大强國となり、ペルシア王ペロズ(Peroz)の如きは四八四年これと戰て陣歿するに至りしが、突厥帝國の興起するに及び、五五七年遂にその併呑する所となりて亡び、その人民は大月氏の遺民と共に突厥の中に混じたり。而して嚈噠とササン朝及び突厥との交涉は後章に至り、更に詳說する所あるべし。

## 第十二章　東部トルキスタンと東西の貿易

中央アジアの大部は遊牧民の根據地として文明史上重要となりしが、タリム盆地即ち東部トルキスタンは、他の意味に於いて歷史家の注意を喚起す。天山、パミル高原、崑崙山間の平原の大部は、實に茫々たる沙漠及び曠野なれども、大小の溪流その間に流れ、その大なるものはタリム河及びロブ・ノル(Lob-nor)湖に注ぎ、所々に膏腴なる沃地を造る。而してこの沃地は永住民を支へ、且つ山麓に沿へる貿易地の連鎖を形成す、思ふに古代にはこの種の沃地多くして中間の荒地少かりしならん。これを以て

當時タリム盆地は東西兩文明の間に橋梁を造り、且つその諸地方に高尙なる文明を發展せり。先史時代の文明を研究せんとするものは、第一に東部トルキスタンを研究せざるべからざるの理由は、實にこゝに存す。

中央アジアの地味變じて所々に新曠野を生じ、且つ遊牧民その地に現はれて野蠻なる生活をなせしも、古代の文明はなほその命脈を維持したりき。而してタリム盆地を經由する商業的交通は實にこの文明の遺物なり、世の學者或は遊牧民の絶えず諸方に移住するを見、これを以て始めて貿易を振興せるものとなし、その天性貿易に向はず、且つこれに熟せざるの事實を忘るゝに似たり。遊牧民は都市商業家の地窖に見るがごとき貨物を貯ふるを好まず常に家畜を以てその主もなる財産となし、その多寡に應じて適當なる牧地を占有せんことを願ふ。故に眞の實業家はタリム盆地に於いてもまた常に沃地の定住民中にあり、されど定住民の商業は遊牧民の好意によりて興隆し、時にはその移住及び征服によりて舊商路再び開け、多年分離せる諸地方の交通恢復せられたることは勿論なりとす。

東部トルキスタンとは支那の古代に所謂西域の地にして、漢初は東玉門（甘肅安西州敦煌縣）西陽關（敦煌縣西南）より西葱嶺に至る間をいふ。その地もと三十六國ありしが、後稍々分れ

て五十餘國となる、皆匈奴の西、烏孫の東にあり。而して玉門、陽關より西域に通ずる二道あり、敦煌の西北樓蘭(後の鄯善今のチェルチェン(Cher-chen))より西して且末、精絶(二國共にイリの南にあたる今タクラ・マカン沙漠中に沒す)扜彌(クルジア)を經て于闐に出で、また西北して莎車(ヤルカンド)に至るを南道とし、南道より西の方葱嶺を踰ゆれば、大月氏安息(パルチア)に出づ。また樓蘭より北して伊吾(ハミ)に至り、これより西して東師前王庭(トルファン)に至り、焉耆(ハラシアル)龜茲(クチアル)を經て疏勒(カシガル)に至るを北道とし、北道より西の方葱嶺を踰ゆれば大宛(フェルガナ)康居(キルギス曠原)奄蔡(アラニ)あり、而して葱嶺の西南は罽賓、烏弋山離(アレクサンドリア即ち今のヘラット)にして、罽賓の東南に身毒(印度)その西に高附(カブール)あり、更にその西は安息、條支(シリア)にして以て西の方太秦に接す、太秦は一に犂軒といふ、蓋しローマ東領なり。これを支那古代の記錄に見えたるトルキスタンの概要とす。

昔時東西アジアの貿易品は、皆タリム河の盆地即ち西域南北兩道を經由せり、而して當時の貿易品中始めて記錄に現はれたるものを絹とす、若し支那の傳說にして誤なからしめば、養蠶は夙に支那に行はれ、かの黃帝の皇后のごときは力めてこれを奬勵せりといふ。然れども支那の古記錄に絹貿易に關する記事なきを以て見れば、その商業家は多年これを重要視せざりしがごとし、故に當時主としてその貿易に從事

せしものは、貴重なる支那の絹を熱望せる外國の商業家なりき。西部アジアの諸國民は貴重なる絹の産地たる支那に關して種々の想像を逞うし、詳かにその實情を知らんとして夙に計畫する所あり、「歴史の父」ヘロドトスは、これに關してアリステアスの旅行記アリマスペイアを引用しぬ。アリマスペイアは支那に關して何等の記する所なしと雖どもこれを讀まば絹貿易及びタリム盆地の狀態を知るべきものあり。アリマスペイアの初めて世に現はれたるはキムメリア人の遠征後にして、本來詩歌的著作なれども、その記述實際の探險旅行に基けることヰルヘルム・トマシエック(Wilhelm Tomachek)のこれを證せるがごとし。アリステアスの訪へりといふイッセドン人は、實際タリム盆地に住せし一種族ならん。イッセドン人の西隣にはマッサゲタ人あり、これ即ち西部トルキスタンに住せるイラン種の遊牧民なり。イッセドン人の名はイラン商業家の與へたるものにして、その種族の自稱にあらず、これ即ち支那の記錄にこの名を見ざる所以なりとす。思ふにイッセドン人は、當時北方に分布せるチッベト種族の一部にして、匈奴のためにタリム盆地の住地を逐はれたる後代の月氏ならん。假令然らずとするも、月氏に何等かの關係ありしがごとし。而かもこの地方の住民はアリステアスの時代にその種類を同うせず、往々スキタイ族と認めらるゝチベット

種のイッドセン人は、タリムの沃地に權力を振ひし遊牧民なれども、古文明の代表者の子孫がこの沃地に住せると、近時東部トルキスタンの諸都市に混合民の住するがごときものありて、商業家或は農業家として、この地に來りし長顱種族のイラン人は、夙に短顱種族の住民及びチベットの遊牧民と混合したりしならん。

慓悍なる遊牧民アリマスプ(Arimasp)人は、屢々タリム盆地を侵したるがごとし。アリステアスの記述によるに、この遊牧民はイッセドン人の北隣に住せりといふ、これ即ち匈奴を指せるものなり。匈奴は已に支那に寇し、前第二世紀にはまた月氏を西に追ひて、東部トルキスタンの狀態を根底より變更せり、されど沃地の定住民はこの運動のために大なる影響を被らざりしがごとし。アリステアスはまた「鷲頭獅身の怪獸」(Griffin)と、アリマスプ人との戰爭を記述す、この「怪獸」は南部シベリア青銅文化の代表者、黃金の裝飾を施せる墳墓の建築者たるアルタイの山民なること明けし、故にアリステアスは慓悍なる匈奴民族の有らゆる方面に於ける活動を寫せるものといふべし。匈奴は東支那の平原に寇し、南中央アジアの貿易の代表者チベットの遊牧民、タリム盆地の住民を脅し、北アルタイ山に遠征してその諸種族を苦しめたりき。その後年ヨーロッパを蹂躙せるがごときは、この古爭鬪の連續に過ぎず。アリステア

スは詳細にイッセドン人及びアリマスプ人を記せしも、支那人とヒペルボル（Hyperbor
人とを混同せるがごとし。ヒペルボル人は北極地方に住する平和的人民なり、ヘロドトスの著述によるに、ヒペルボル人に關するアリステアスの記事は、殆どセル（Ser
人即ち支那人に關する後代の記述に符合す。

アリステアスの記せるタリム盆地の諸都市及び商業的殖民地にして、現存の諸地方に當つることを得るものあり、されど是のごときは殆ど例外にして、多くは已に沙中に埋沒せること、近來スヱン・ヘヂン（Sven Hedin）氏の探檢せる所によりて明かなり。古代諸都市の位置を知るべき助となすべきものに、マケドニア（Macedonia）の商業家チチアヌス（Titianus）の記事あり、これを讀まば第一世紀に於ける東部アジアの商業地を考定するを得べし。當時東部アジア商家業の向へる道路は、サマルカンドよりフェルガナに通じ、キジル・ス（Kisil Su）河の流域に達せり、而してその門にはカシア（Kasia）地方の重要なる商業的都市ありき、この商業的都市は近世のカシガル（Kashgar）なること疑なし、何となればタリム盆地の諸都市はその位置に於いて、古よりこれに及ぶものなければなり。アリステアスの所謂「スキチアのイッセドン」はトルコ人の重要市場たりし近世のクチアルにして、アスミラ（Asmira）は今日のハミならん。西部アジア隊商は當

時皆甘肅地方に來れり、甘肅地方の商業的都市にして第一に位するものは、近世の肅州にして、トマシェック氏の說に從へば、古代のドロサチェ(Drosache)なりきといふ。

政治上より觀察すれば、商業の大中心は明かに一種の獨立を享有せりと雖ども、その通商を阻害せられんことを恐れ、遊牧民に對しては勉めて、戰爭を避けたりき。都市村落の住民と遊牧民との關係は一定せず、文明野蠻の兩勢力は常にタリム盆地に於いて一盛一衰せり。而して中央アジアと印度との關係は、その發端詳ならざれども、東部トルキスタンはその橋梁となりて、印度の風俗習慣、就中宗敎を支那及び中央アジアの殘部に傳へ、漸次中央アジアの住民の性格及び習慣を改革したりき。

## 第十三章　通商の變化

中央アジアの大商路による貿易は、常にその狀態を一にすること能はず、外部の影響及び内部の變亂によりて、或は榮へ、或は衰へ、且つその性質に變化を生ぜり。實に中央アジアの商業は絕えず移易し、その道路及び慣習は變更せられ、その貿易品はまた損益せられたりき。

商路の興廢は運輸の利不利によりて決す、蓋し運輸に利なるものは興り、不利なる

ものは廢る、これ自然の結果にして最も睹易きの理なり。 而して運輸を不利ならしむるものには自然的障碍あり、人爲的抵抗あり、この二者互に關係を有し、相結びて商路の運命を左右す。 今若し自然的障碍最も少き道路と雖ども、その間に盜賊の出沒するあり、不法なる過税の徵せらるゝあらば、商業家たるもの、艱苦を忍びて他の道路によるの外なかるべし。 中央アジアにありては、一方に於て道路を異にすること、東西兩アジアの貿易に利益あり、他の一方に於てはまた、慓悍なる遊牧民直接に掠奪、間接に過税によりて商業家を苦むること絶えず、故にその道路の屢々變化せる、今日世に存する記錄によりて、悉くこれを知るべからざるや明けし。 匈奴の北方に權力を振へるは、明かにその諸道路を荒廢せしめ、貿易をタリム盆地の諸道路に限るに與かりて力ありき。 ギリシア古典のアリマスプ、エッセドン二種族の戰爭は半ば前者の貿易獨占權を鞏固にするの目的を有せり、而して匈奴は學者のエッセドンと同一視する月氏を驅逐せる後、タリム盆地を經て北方の諸道路を占有し、チベット遊牧民の祖たる羌はまた南方の諸道路に權力を振へり。 有名なる張騫が漢の武帝の時西方に到る道路を探檢して、前一二二年帝に上つれる書によるに、當時貿易が南方に於て四川及びツァイダム(Tsaidam)を經て、タリム盆地の南境に行はれたるに反し、北方に於ては匈奴、

中央に於ては先その諸道路を阻めること明かなり。支那が從來の政策を一變して、遽かに曠野の住民に注目するに至れること、主としてこの狀態を憂ひたるによらずんばあらず。

支那が全く道を異にして、新たに他の文明諸國と交通を開始するは、中央アジアの貿易に不利なる影響を及ぼすものなり。而して武帝はチベットを經て直接に印度と交通を開始し、よりて以てタリム盆地を經て印度の貨物を輸入するの必要を除去せんとせしも、遂にその目的を達すること能はざりき。されどチベットによる印度貿易は、假令盛ならざるにもせよ、武帝以前已に久しく行はれたりしなり。海上の貿易は、南部支那の征服によりて、支那、印度兩國港灣の距離短縮するに及び、始めて興隆せしが、支那國民の眞剌激を感ぜるは、第二世紀に再び中央アジア諸道路の命令權を失ひたる後に屬す、而してこの事たる、頗る注意すべきの價値あり。

道路の屢々變化せることかくの如し、而してこの種の變化はまた慣習の上に見ることを得。蓋し遠隔なる地に貨物を送るには二種の方法あり、甲種族先づ國境貿易の方法によりてこれを乙種族に傳へ、乙種族またこれを丙種族に傳へて、遂にその目的地に致すことと、これその一なり。甲種族或は甲乙丙種族中にありて、傳送を業とす

るもの、その貨物を積みて全距離を旅行すること、これその一なり。而して前者は通常比較的近隣の地に行はれ、後者はこれに反して遠隔の地に行はるゝこと勿論なりとす。昔時中央アジアの諸道路に於ては、事情の異なるによりてこの二種の方法行はれたり、然れども前者は後者に比してその發達早きこと疑を容れず。イラン派の商業家は、常に隊商によりて貿易を行ふに勉めしかど、支那の商業家はこれに反して、近來に至るまでその國境を越ゆること稀なりき、蓋し支那の對外方針これをして然らしめたるなり。東西の直接貿易を阻害するものは慓悍なる遊牧民にして、殊に匈奴の如きはその諸道路を荒廢せしめ、これを經由すべき貿易より得べき利益を失ふも殆ど顧みざりき。東西の貿易がかくの如く遊牧民のために阻害せられ、危險と困難とを感ぜるの結果、諸所に市場起れり、西部トルキスタンのサマルカンド、東部トルキスタンのカシガルの如きこれなり。

貿易の變化は、貨物に影響を及ぼすこと最も著し。昔時中央アジアは玉、大黄、麝香及び黄金を支那、印度及び西部アジアに輸出せり。然れども當時貿易の活氣を帶べるは、概して西方諸國民の支那の貨物を要求せるによる。而してこの關係より、支那並に西方諸國の貿易品に變化を生ぜること少からず。

支那の產物中、西方諸國に於て最も珍重せられたるものを絹とす。西方の古典據には支那國民を呼びてセレス(Seres)といへり、絹を產するもの丶義なり。絹貿易の始は詳かならず、アリステアスまたこれをその著述に載せざりしが如し、然れどもヰルヘルム・ゲセニウス(Wilhelm Gesenius)氏は聖書のエゼキエル(Ezekiel)及びイサイアー(Isaiah)に、絹及び支那國民に關する記事あることを指摘せり。蓋し支那と西方諸國民との間に貿易の行はれたることを說明するには、絹の如き有力なるものを以てせざるべからず。當時絹の多くはフェニキアにて染められ、或は新に織られて市場に現はれしが、支那の絹は他の諸國民の養蠶を知るに及びて大打擊を受けざる能はず、これ到底長く避くべからざるものたり。實際絹糸の生產は、漸次古商路に沿ひて諸方に傳播し、前一四〇年支那國民の西進がトルキスタンに桑の栽培と蠶の飼養とを傳へてより、トルキスタンは漸次絹糸貿易の中心となれり。ペルシアまた養蠶の道を傳へて、盛に絹糸を產し、支那に到る諸道路を占有して、一時殆ど絹貿易を獨占し、たゞ五五七年東ローマの蠶卵を傳ふるに及びて、その獨占權を失ひたるのみ。こゝに於て支那の絹糸貿易は益々衰へ、近年新にヨーロッパ諸國と海上の貿易を開くに及び、始めて東南ヨーロッパの絹糸と競爭することを得るに至れり、蓋し運賃を節約して、その價を低

廉ならしむることを得たればなり。

支那の輸出品中、絹糸に次ぐものを漆器とす、東部アジアの漆器には、今日なほ西方諸國に於いて貴重せらるゝものあり。而して漆器貿易は古代にありて甚だ利益ありき、思ふに當時西方諸國に輸出せられたる漆器は、今日の日本漆器とその種類を同うせるものならん。また支那の貿易は、磁器及び茶の絹糸に代はりて珍重せらるゝに至りて全く變ぜり。磁器は支那に於いて第七世紀以前に發見せられしかど、その產出甚だ多からず、これに反して陶器は太古より支那に於いて多く產出せり。茶は第四世紀に至るまで重要視せられず、而して他の諸國に於いて珍重せらるゝに至りしは、遙かに後代の事に屬す、殊に中央アジアの遊牧民は甚だ茶を好み、これがために支那の意を迎ふるの必要ありき。

支那は古より西方諸國民の需要に應じて諸種の貨物を供給せしが、總て西方諸國民の支那及び印度に供給せる所を見るに、全くこれに反するものあるが如し。當時西方諸國民は、支那及び印度に供給すべき貨物を知らず、支那及び印度は、實際また西方諸國民の供給する貨物を求めず、偶〻これを求むるも殆どいふに足らざりしのみ、故に西方諸國民にして東方の貨物に當らんとせば、東方諸國民の喜ぶ貴金屬を以てせ

ざるべからず。こゝに於いて西方の金銀は支那及び印度に流出し、東方の貨物のその地に流入するに比敵することを得るに至れり。ローマの史家老プリニウスの計算によるに、ローマ帝國のこれが爲めに年々失ふ所は殆ど一億圓を下らず、而してその大半は印度に至るものなりといへり。

西方の諸國は、東方の貨物に對するに、永久その鑛物を以てすること能はず、たゞ高尙美麗なる工藝品を以てその缺を補ふことを得たるのみ。フェニキア及びシリアの工場が、夙に東方に輸出する貨物を產せるは、この點に於いて頗る注意すべきの價値あり。當時西方の輸出品中、支那に於いて最も珍重せられたるものを織物とす、然れども織物は、古より支那に存せざるにあらず、故に西方の織物貿易を盛ならしむるには、紫を以て有名なるフェニキアの產物を以てするの必要ありき。織物の外、東方に於いて珍重せられたるものは、シリアの工場に產する玻璃なり、支那の記錄によれば、玻璃は東方に於いて珍重せられたること寳石に劣らず、而してこれを製造するの術知られざりし間、その價甚だ不廉なりきといふ。然れどもその術一たび東方に知らるゝに及び、玻璃貿易は頓に衰へたり、これなほペルシア及び東ローマの養蠶を傳ふるに及び、中央アジアを經由する絹貿易の大打擊を受けたるが如し。而して玻璃貿易

の衰へたるは第五世紀の頃にして、東ローマの養蠶傳習に先だつこと約一百年なり。されど以上の貨物は中央アジアを經由する唯一の貿易品にあらず、支那はこの間に夥多の鐵器を西方諸國に供給せることあり、西方諸國はまた香料及び寶石を支那に供給せり、而して鐵器はシベリア貿易及び遊牧種族の貢献によりて支那に達せるものとす。この外印度貿易の流はタリム盆地に於いて、東西貿易の流と結合せり。然れども以上の貨物は主要なる産物に對する需要減ずるに及び、貿易の衰頽を防ぐこと能はざりき。

## 第十四章　漢の東部トルキスタン征服

支那が外國と通商の必要少きこと前に述べたるが如し。外國の商業家は、貴重なる支那の貨物を求めて續々その地に來れども、支那の商業家はその國境を出づることなく、必要なる場合に、その貨物を以て外國の貨物と交換し、容易にその欲望を滿足せしめたり。支那貨物の絶えず國外に輸出せらるるや、國内の産業日を逐うて發達し、輸出品の第一位を占むる絹及び漆器の産出は、支那市場の需要を凌駕するに至れり。故に輸出にして不意の打撃に遭はゞ、その支那に及ぼす影響實に輕からざるも

のあり。加之、印度、アラビアの香料及び藥材は、支那に於いて漸次注意を惹くに至れるを以て、匈奴の月氏を驅逐してタリム河の流域を遮り、チベット遊牧民の諸道路を扼してその輸入を妨害するは、支那の爲めに苦痛たらざる能はず。されば支那は匈奴の全然貿易を杜絶し、若しくは不法なる過稅によりて、これを妨害するを見るに及び、遂に永く忍ぶこと能はず、精力絶倫なる統治者の出づるを俟ちて直に復讐を企てたり。

然れども支那人のタリム盆地に進める理由は、また他にあり。蓋し遊牧民の勢力を挫くには、その背後に出で〻、支那の地位を鞏固にし、所々に堅牢なる城砦を築きて曠野地方を二分するの必要あり。而してこれが爲めには、タリム盆地を經由する古代の商路に沿ひて進み、同時にその諸都市を以て運動の根據地とせざるべからざりしなり。

支那が遊牧民の跋扈を制するの道かくの如し。これを以て漢の武帝は前一二五年の頃、再び中央アジアの商路を開き、且つ匈奴を驅逐せんが爲めに、時恰かも北部バクトリア及びソグヂアナを征服して、タリム盆地の西境に勢力を振へる大月氏と同盟を結ばんとし、張騫を遣はしてその交涉に當らしめしが、大月氏はこの時バクトリ

アの成効に醉ひて、喜びてその交渉に應ずるの色なかりしかば、張騫はこれと同盟して、匈奴の背後を衝くの策を成すこと能はず、よりて西方諸國及び印度に關する報告を齎し、これによりてその失敗を償へるは前已に述べたるが如し。こゝに於いて、武帝はチベットを經て直接に印度と交通するの道を開かんとせしも、遂にその目的を達すること能はず。この間に漢軍は匈奴と激戰して古代の商路をその根據地となし、甘肅の西北方を占領して軍隊的殖民地を創建せり。かくて匈奴は屢々漢軍のために破られてその勢力を失ひ、遂にタリム盆地を驅逐せられ、支那は貿易を再興し、且つその隊商及び國使は西方に赴きて安息即ちパルチアと政治上の同盟を作りぬ。

かくて漢が匈奴を斥攘したるの結果タリム盆地及び西部の諸國は、東部と密接なる政治上の關係を結び、半ば支那の主權を承認せしが漢の直轄領は、前一〇八年に至るまで、タリム盆地の東境ロブ・ノルを越えざりき。これより先き前一〇一年、漢軍は疏勒即ちカシガルに進みしも、タリム盆地に於ける支那の權力、これがために確立せず、たゞ漢はこの間に烏孫と同盟して匈奴を討てりといふに過ぎざるのみ。當時匈奴はなほ强大なる勢力を有し、屢々東部トルキスタン諸國及びキグル族を脅して、支那との關係を維持することを妨害せり。而してタリム河の流域及び西方の貿易に

及ぼせる匈奴の影響は、その成敗に從ひて一なることを得ず、漢と戰ひて大敗するに及びては一時殆ど無勢力となるを免れざりき。

然れども中央アジアの他の遊牧種族は、またこの種の事件に關係を有せり。初め莎車即ちヤルカンド(Yarkand)王子なし、烏孫王の子を以てその繼承者と定む。國民よりて王の死後、漢の宣帝の許可を得て、教育を支那に受けたる烏孫の王子萬年を迎へて國王となす、蓋しこれによりて益々漢及び烏孫の保護を得んとせるなり、先王の弟呼屠徵これを見て甚だ喜ばず、乃ち匈奴の力を假りて前六五年新王を廢し、且つこれを殺す。こゝに於いて漢の使者衛侯馮奉世、大宛(フェルガナ)より至り纂奪者を討ちてこれを滅ぼし、更に他の昆弟の子を擁立して國王とせり。されどタリム河の流域に於ける漢の勢力は漸次衰へ、第一世紀の初めには莎車の國運頓に興隆しぬ。後漢の初め莎車王賢、東部トルキスタンの總督たらんとして得ず、次いでまたタリム盆地の全部及び他諸國の主權を要求し、且つ通商を妨害するや、支那は兵力を以てこれを制せざるべからざるに至れり。されど莎車の敵は主として匈奴にして、その新王國は數十年間匈奴の爲めに苦められき。

七二年支那は再び西進を企てたり、これタリム盆地を經て支那に傳來せる佛教の

刺激を受けて、西方と交通を開かんとするの望を起せるによる。後漢の明帝の大月氏に遣はせる使節蔡愔は、六五年を以て支那にかへり、佛敎に關して詳かに復奏する所あり帝よりて長安に白馬寺を建立し、儒學の敎理と共に、新敎理を尊敬するの意を表せり。されど西進の原因は主として、南匈奴の北匈奴と結合して貿易を阻害し、且つ大にタリム盆地を亂せるにありき。七二年漢軍は匈奴を討たんがために進みぬ。而して有名なる班超は、その一軍を率ゐてタリム盆地に進み、軍事的才能と外交的手腕とをふるひて、直に貿易を恢復し、且つ匈奴の壓制に苦める諸國を救ひて、その地に漢の勢力を扶殖せり。

かくて漢は容易に戰勝者の名譽を得てこれに滿足せず、偶々太秦即ちローマ帝國の西方に雄視するを聞いて、これと國境を爭ふの意を生じぬ。蓋し大國と大國との間には一種の引力あり、互にその間に介在する幾多の小國を併呑して、その國境を爭はんとするは、史上その例に乏しからず、班超のローマ帝國に着眼せる、もとより怪むに足らざるのみ。されど支那人は、當時ローマ帝國に關して確たる智識を有せず、當時の記錄によるに、單にその東半部を知り、安都即ちアンチオキアを以てその首府と信じたるが如し。而して班超はタリム盆地の征服後、山脈を、越えて西に進み、遂にカス

ピ海に達し、一〇二年部將甘英を遣はしてローマの國情を偵察せしむ。されどその報告は進擊に不利なるものあり、且つ齢已に傾きて劇務に堪へず、一〇二年支那に還り、幾もなく逝けり。

班超の征服が政治上甚だ重要なることと勿論なりと雖も、その効果は永續せざりき。初め漢軍の現るゝや、その意を迎ふるに汲々たりし幾多の小國はその有力なる保護を得ること能はざるに至り、去りて他の有力者に傾けり。加之漢は遠征に費す所多くして、西域諸國の貢獻は、以てこれを償ふに足らざりしかば、領土及び貿易の擴張を不必要とする從來の政策は、再び勢力を得るに至れり。一二〇年の頃已に玉門關西の領土を放棄するの利を唱ふるものあり、而してタリム盆地に至る軍用道路のなほ放棄せられざりしは、實に班超の子勇の建言による。されどこの後、支那は亂れて國內統一せざること多年、對外政策これが爲めに振はず、海上の貿易興りて陸上の貿易またその重要を減じ、タリム盆地の諸國はこの後多年平和を維持し、支那よりも寧ろ印度の感化を受けたりき。

## 第十五章　匈奴の西遷

班超はローマ帝國攻撃を企てしも、支那軍の西進は文明を害せずして、却てこれに好影響を與へたりき。而して中央アジアの遊牧民が、西部アジア及びヨーロッパに侵入せるは、更に重要なる事實なりとす。北部印度はこの時已に大月氏の手に落ち、ヨーロッパの大部が、また遊牧民のために蹂躙せらるべき時は近づきつゝあり。これより先き匈奴の大部は、蒙古にその權力を樹立せしが漢の攻撃によりて瓦解し、その一部は轉じて西方の文明諸國に向へり。而して匈奴及び他のアジア遊牧民の進撃がヨーロッパに及ぼせる影響は、中央アジアの歴史に見るべからずと雖も、匈奴の一部フン侵略に至るアジアの事件を略述するは、必ずしも無益の業にあらず。

西方の文明諸國は、多年アジア及びヨーロッパの遊牧民の攻撃を受けざること久し、これ蓋し東部ヨーロッパの遊牧民が漸次定住民と化し、農業に意を注ぐに至れるによる奄蔡即ちアラニ(Alani)はギリシア、ローマの古典に所謂アオルシ(Aorsi)にして、一時最も有力なる國民なりしが、この名は嚴肅なる意味に於ける國民よりも、寧ろ黒海よりアラル海に至る諸地方を占有し、遊牧を業とせる諸種族の集合名稱なりしが如し。而してアラニは一部イラン・スキチア種族、一部ウラル・アルタイ種族の子孫より成れり。本來この名稱を有せるものは、前第一世に、カウカソス山北の地を以てその住所

となし、前六五年にポンペウスと戰ひ、次いでその勢力を曠野地方に擴張し、一時ポントス及びカスピ海沿岸の遊牧民の大部を統御し、屢々この地方に於いてローマ軍と戰ひしも、この事件は史上重要ならず。支那の記錄に從へば、奄蔡の一部は一時ソグヂアナに屬せりといふ。またアラニは屢々ペルシア及びローマの管轄に屬するカウカソス山の關門を攻擊せり、然れども大移住の起れるは、フンの侵略以後に屬す。

匈奴の始めて西進を企てたるは、前第一世紀の中葉にして、その帝國內亂のために分裂し、諸侯竝び起りて權力爭奪を事とせる時なり。この後呼韓邪單于、諸侯を征服して帝國を統一せんとするに及び、その兄郅支は起ちてこれに抗し、呼韓邪をその國より驅逐して自ら郅支單于と稱し、次いで西方に赴きて獨立し、漸次その領土を擴張しぬ。偶々康居王、烏孫に抗せんがために援を郅支に求むるや、郅支はアラル海の沿岸にその權力を樹つることを得たりき。思ふにこの地方のアラニは、一部已に匈奴に服從せるならん。而してタリム盆地に於ける支那との戰爭は、前三六年郅支單于の死に終を告げ、匈奴の權力をして頓に衰へしめたり。

然れども九〇年匈奴の北單于、漢の破る所となりて死し、その弟於除鞬部下を率ゐて西方に進み、昔時の移住者と結合するに及び、匈奴の權力再び强大となれり。ヒル

ト氏の說によるに、匈奴の移住は前後二回共にその種族中最も慓悍なるものを西方に送れりといふ。故に西部匈奴はその種族中最も戰を好み、最も險を愛するものにして、その諸種族を征服するや、またその種族中最も勇敢なるものと結合せるが如し、世界を震動せる西部匈奴即ちフンの國民性は實にこの方法によりて發達せるなり。

支那は已に班超の遠征によりて西方に得たる好地位を失ひ、第二世紀の初に匈奴及びその同盟たる諸種族とタリム盆地に戰へり。而して西部匈奴は、この後また支那の附近に現はれず、蓋し蒙古恢復の企を放棄し、他の方面にその注意を轉じたるなり。かくて西部匈奴即ちフンは、靜かに機を待つこと前後二百年、三五〇年に至りて始めて蹶起し、先づアラニを擊ちてその國王を殺し、その國民の一部を征服し、一部を西方に壓迫しぬ。こゝに於いて東部ヨーロッパ及びシベリアの曠野に至るの道開け、その前進また意のまゝのみ。當時膏腴なるペルシアの平原がフンのために蹂躪せられざりしは、ササン家の新ペルシア帝國、なほその權威を維持せるによる。

フンの侵略が、ヨーロッパに大影響を及ぼせるは、主としてローマ帝國の權威衰へ、ゲルマニ民族の統一を缺けるによらずんばあらず。三七五年バラミル(Balamir)の部下を率ゐてドナウ河畔の諸國に侵入するや、ヨーロッパ諸國はこれがために震動せり。

されどこの震動はアジアの歷史に關係なし、案ずるにフン及びアラニは當時擧げて西進の運動に加はりしにあらず、而してフンはなほポントス及びカスピ海沿岸にその主權を維持せしならん。アッチラ(Attila)の死後、フニの帝國瓦解するに及び、その臣民の殘部は再び東方に退き、フン及びアラニの故鄕に遁れたり、而してこの地方はイルナク(Irnach)の權力を樹立せる所以なり。イルナクはヘルナク(Hernae)或はイルナス(Irnas)ともいふ、アッチラの愛子とす。第六世紀に及び、フンの帝國は分裂して幾多の小國を生じ、その諸君主は屢々ペルシア、ビザンチォンの戰爭に加はり、また互に權力を爭ひて干戈を事としぬ。かくてフンの權力亡ぶるや、その異分子は各自の勢力を恢復し、史上遂にフンの名を見ざるに至れり。

## 第十六章　匈奴帝國滅亡後の北狄

匈奴の大帝國瓦解して、その多數部落西方に退きてより、モンゴリアの大部は鮮卑の手に歸せり、蓋し當時漢が茫々たる曠野を領有することを望まず、或はこれを望むもその力足らざりしが故なり。鮮卑はもとツングス族なる東胡の一部にして、東胡の匈奴に滅ぼさるゝや東モンゴリアに遁れしが、後匈奴の衰微に乘じて西方に進む

や、匈奴の殘部及び曠野の他の住民を吸收して、モンゴリア混合國民の一部分となれり。而してその領土は通常獨立的政治制度を有せる幾多の小國に分裂せるも、時にはまた英傑出でゝこれを統一し、恐るべき大勢力を作りて、支那及びタリム盆地にその影響を及ぼせることなきにあらず。

鮮卑の勃興せるは一五〇年の頃にして、檀石槐といへるもの恰かもその一種族の酋長となり、直にその權力を近隣に及ぼせる時なりき。而してこの新帝國は匈奴の舊帝國と略ぼその區域を同うし、また舊帝國に倣ひて、その領土を三部に分ちぬ。新帝國の統一は實に檀石槐の才幹に歸す、故にその一九〇年に死するや、帝國の權威著しく衰へたり。されどこの時支那には漢朝の滅亡あり、群雄幷び起りて互に權力を爭ひしかば鮮卑は幸にしてその攻擊を免れ、チベット族の遊牧民羌と同盟して一時西方の貿易を妨害することを得たり。次いで鮮卑の諸部は、支那の內亂に乘じてその內地に移住し、或はその傭兵となり、或はその地に獨立國を創建しぬ。而してこれ等の諸部中、最も有力なるものを托跋部といひ、三三八年より三七六年に至るまで、北部山西の代に君臨せり。この後托跋珪の時に至り三八六年その地に後魏帝國を創建し、漸次これを北部支那に擴張して、遂には江北を一統しぬ。五三四年後魏は分裂し

て、東西魏の二國となり、前者は五五〇年、後者は五五七年に亡べり。これより先き托跋部は全く支那化し、支那傳來の政策によりて、曠野の遊牧民と戰はざるべからざるに至りき。

この間モンゴリアの形勢は漸次變化し、鮮卑の大部支那に移住せる後、その地は悉く柔然一に蠕々の有に歸せり。柔然は盖しシベリア原住民の諸分派を結合せる混合種族にして、言語學上トルコ・タルタル種に屬し、初め野蠻暴戻を以て名あり、その近隣の遊牧民にすら嫌惡せられ、後魏の諸帝は多年この種族を抑制しぬ。柔然は第四世紀の終にアルタイ山脈の諸種族を征服し、更に西に進みて中央アジアの諸道路を占有し、またその權力をモンゴリアに擴張して高句麗の國境に及べり。而してこれ實にその酋長社崙の力によるものとす、社崙はタルン(Talun)或はザルン(Zarun)といふ。トルコ・モンゴリア系の諸民族に普通となれるタルタルの名は蓋しその繼承者大檀即ちタタラ(Tatara)或はヅダル(Dudar)より出でたるものなりとの說あり。而して後魏は、速かに柔然の新帝國と戰はざるべからざるに至り、その軍隊は四二五年以後その領土に寇せる柔然を擊退し、且つ古代の商路に沿ひて、再びその勢力を西方に擴張し、これによりて遊牧民侵寇の根據を覆せり。こゝに於いて柔然は南朝の宋及び梁

の二帝國と同盟してこれに當りしも、同盟によりて利する所少く、屢々敗北して商路の命令權を恢復すること能はず。かくの如く柔然は屢々魏軍のために破られたるも、これがために全く滅亡するに至らざりき。而かも內亂のためにその勢力衰へ、突厥の侵略に遭ひて滅亡せるは第六世紀の中葉に屬す。かくて柔然の滅亡するや、その種族の大部は匈奴の例に倣ひて西方に遁れたり、蓋しこの後東部ヨーロッパを征服せるアヴール(Aval)は、この種族ならんといふ。アヴールは中央アジアに於ける柔然の殘黨の如く、後他諸國民に吸收せられてまた史上に現はれざりき。

遊牧民の大帝國が遂に全く滅亡せることかくの如し、然れども中央アジアは、全部蠻族の牧畜を業とする一地方にあらず、比較的文明の域に進める殖民地が、東西の貿易に好地位を占むるタリム盆地以北にもまた西方に至るの商路あり而して山麓には農業に適する諸地方散在せり、更に北すればアルタイ山あり、諸種の金屬その山中に產し、原始的文明の中心として、屢々遊牧民の侵略を被ふれるに拘はらず、工業なほこの地に盛なりき。

天山よりアルタイに至るの間には、無數の都市及び永住的國民あり、されどその政治的權力は概して遊牧民の手に在りしが故に、太古にすら文化の傳播者たること能

はず。キグル(Uigur)即ち回紇は一にユグル(Jugur)イグル(Igur)といふ。多年この地方にありて最も重要なる地位を占有し、トングラ(Tongra)スキト(Sukit)、アヂズ(Adiz)、サプ(Sap)等九種族の核子を形成しぬ。キグルは二部に分る、初めセレンガ(Selenga)河畔に殖民し、後エニセイの源に弘布せる北部キグル、天山の南部及び東部に住せる南部キグルこれなり。而して前者が支那の所謂高車或は鐵勒にして、高尚なる文明を知らざるに反し、後者はその國土東西交通の要路に當るを以て、文明諸國民の感化を受け、その都市には諸種の文明混和して、他の遊牧民の生活に大なる影響を及ぼせり。されどキグルの勃興は突厥帝國瓦解の後にあるを以て、その詳細なることは後章に讓り、これより突厥即ちトルコ帝國の記述に移らん。

## 第十七章　突厥帝國

モンゴリアに於ける柔然の主權が、突厥の爲めに破壊せられたることは前章に述ぶる所の如し。突厥はもとアルタイ山に於いて有力となれる一民族なり。されどエニセイ系の文明を代表せず、純然たるモンゴリア系の遊牧種族に屬し、漸次その勢力を恢復せる匈奴の一分派ならん。案ずるに突厥の勢力を得るに至れるは、アルタ

イ山の金屬に富めるにあり、而して突厥は自らその採掘精煉に從ふべきか、將たその臣民たる古代の定住民にこれを委すべきかを知れり。柔然の突厥と戰を開くや、突厥を呼ぶに「吾等の鍛奴」なる語を以てせしも、思ふにこれたゞ故らにこの語を用ゐて敵を罵詈せるのみ、實際突厥の鍛冶を業とせるをいへるにはあらじ。されど中央アジアの遊牧民は、他の遊牧民に比すれば鍛冶を尙び、モンゴリアの傳說の如きはその國民的英雄チンギス・ハン(Tchingis Khan)を以て鍛冶とせり。そは兎もあれ胸板、兜、劍、鎗、鳴鏑等、その製造に金屬を要すること多き武器は、元來少數なる突厥をして、その敵に勝つことを得せしめたる主もなる原因たらずんばあらず。

トルコの傳說に從へば、その國民の祖先は狼の哺乳によりて生育せる一男子なりといふ。この傳說は頗るローマの祖先ロムルス及びレムスの傳說に似たり、思ふにトルコの戰士が黃金の狼頭を以てアスチン(Aschin)の一派とせり、アスチンは一に阿史那といひ、托跋朝のために驅逐せられてより保護を柔然に求め、四三九年アルタイ山の南方傾斜地に殖民地を分與せられたる匈奴の一派なり。而してこの種族は一方に於いて聊か支那の文化を傳へ、他の一方に於いてはまたキグルの文化を傳へたるが如し、キグルの文字を採用せるが如きその一例なり。北部キグルと柔然との族

鬪は突厥をして前進の機會を得せしめたり。四九〇年高車即ち北部キグルと柔然の始めて戰を開くや、突厥は何等の運動をなさゞりしも、五三六年高車軍の東方に進みて突厥の領土に觸るゝに及び、その酋長土門は擊ちてこれを降し、五萬の高車を悉くその臣民としぬ。而して土門の容易にこれをなすことを得たるは、中央アジアの曠野に於ける諸民族の互に密接なる關係を有し、混和に困難を感ぜざることを表示するものとす。土門は今や大に勢力を得、多年その基礎動搖せる柔然の主權を拒否すべき機會を待てり。かくて柔然の頭兵可汗が、その女を土門に妻はすことを拒むに及び、直に兵を擧げてこれを攻擊し、五五二年全くその帝國を滅ぼし、これに代はりて中央アジア遊牧民の酋長となれり。こゝに於いて中央アジアはその君主を更へたれど、その狀態を變ずること少なかりき。支那攻擊は遊牧民傳來の政策なれども、今や支那の權力鞏固にして容易にこれを攻擊すべからざるを以て、突厥は匈奴に倣ひて西方に向ひ進軍せり。突厥の最初の成功はソグヂアナ征服にあり。當時ソグヂアナには月氏の後裔なほその權力を維持せしが、突厥は擊ちてこれを滅ぼし、更にタシケンド、フェルガナ及びハリズミア(Kharismia)等の諸國に向へり。而して突厥は完全にこれ等の小國を滅ぼすこと能はざりしも、ソグヂアナの征服によりて、西方の

貿易就中ソグヂアナの絹輸出に於ける利益を掌握することを得たり。然るに當時ペルシアは養蠶の道を傳へて盛に絹を產し、ソグヂアナの輸出を妨害せるを以て、突厥はこれと交渉する所ありしも、遷延徒らに時日を費して、その目的を達すること能はず、よりて五六九年直接に東ローマと交渉するに決しぬ、蓋しペルシアの貿易獨占權を破壞するは、同じく東ローマの利益なればなり。かくて突厥の使節コンスタンチノプルに達するや、東ローマ帝ユスチヌス二世（Yustinus II）はジマルコス（Zimarchos）〔ゼマルコス（Zemarkhos）〕をして西突厥の首府千泉（タラス河畔）に赴き、その大汗と好を修めしむ。ジマルコスの手に成れる記事にはその旅行に關するものあり、また突厥と白フン即ち嚈噠（Ephthar）及びペルシアとの戰爭に關するものあり、而してこの戰爭にはジマルコスの目擊せるものもありといふ。ジマルコスの記事によれば、當時タリム盆地の西部は突厥の領有せる所なりき。東ローマはかくの如く突厥に對するに愼重なる政策を以てせしも、遂にその壓迫を免るゝこと能はず、蓋し突厥の勢力を得ると共に中央アジアの諸種族は、一般に西部アジア及びヨーロッパに進みたればなり。六二六年東部ヨーロッパに進めるハザル（Khazar）即ち可薩は實に突厥の一分派なりき。

突厥帝國はもと三部に分れ、東西の二部には副王ありてその統治に任じ、中部には

最高の酋長ありて和戰を決しき。然るに六〇〇年の頃、支那の隋朝はその帝國をして東西の二部に分裂し、永へにその權力を微弱ならしめたり。既にして六三〇年に至り、支那の唐朝は東突厥と戰ひて大勝を得、頡利可汗を虜とし、再びその勢力をソグヂアナに擴張しぬ。東突厥はこれより幾多の小國に分れ、その部族の一部は、支那に移住して殖民地を與へられ、他の遊牧民に對して國境を守護せり。されどその昔時の光榮を忘れず、支那に於いて再び有力となり、六八一年骨咄祿即ちクトルク(Kutluk)を首領として唐に背き、その勢力をモンゴリアに擴張せり。而して突厥の勢力は、骨咄祿の同胞默啜の世に一層强大となり、支那の帝位を望むに至りき。かくて新興の突厥帝國は一時西突厥を征服し、その權力をソグヂアナに再建せるが如し。

默啜の死後、その甥闕特勤即ちクルテギン(Kultegin)默啜の子小可汗を殺して、その同胞默棘連を立つ、これオルホン(Orkhon)の碑銘に明記する所なり。東突厥帝國は、この時なほ恐るべき勢力を有せしが、忽ちまた衰頽の兆を現じ、七四五年キグルの支那と同盟するに及びて全く滅亡しぬ。これより突厥はまた殆ど中央アジアの歷史に現れず、而して當時突厥の滅亡を促せるものはアラビア人の侵略なりとす。これより先き、アラビア人は、ペルシアを征服してソグヂアナに進みしが、その地方の君主に

は援を突厥に求めて新壓迫者と戰へるものあり、七一二年アラビア軍はソグヂアナ、トルコの同盟軍と戰ひて大にこれに克つ、この時闕特勤は突厥軍を率ゐたるが如し。されど七三〇年のサマルカンドの役は同盟軍の大勝に歸せしか、突厥が諸方面に於いて敵を防ぐの必要は東突厥帝國の滅亡を促せることと明けし。

西突厥は東突厥と分離せる後、ペルシアの主權を承認せざるべからざるに至れり。されど六二〇年に及びてその勢力を恢復せるは、アルタイ山よりアラル海に至る帝國の領土を擴張して、ペルシア及びソグヂアナに及ぼさんとせるによりてこれを知るべし。當時突厥の傭兵はペルシア王位の爭に與りて力ありきといふ。遊牧民の征服せる領土はその統一甚だ鞏固ならず、動もすれば容易に分裂す、蓋し遊牧民は定住民の如くその土地に固着せざればなり。遊牧國民の全部が、その嫌惡する征服者の羈絆を脫して、支那の國境に保護を求めんがために、中央アジアの曠野を越えたるはその好例證なり。當時西突厥はキグルの領土を經由する北方の商路を占有し、唐の南方の商路を占有せるを見て甚だ喜ばず、乃ちキグルと同盟してタリム盆地の諸國に寇し、唐の所領ハミを攻擊す。唐これを憂ひ、兵を擧げて攻擊者を擊退せしかば、突厥は東支那の壓迫を受け、西アラビアの攻擊を被ふりて、全くその勢力を失ひ、その

領土は一時吐蕃即ちチベットの有に歸せり。この後七〇〇年突厥帝國再興の事あり、その戰士はアラビア軍に抗して奮戰せしも、その朝廷及び種族的同盟には朋黨の爭あり、これがため帝國の權威著しく衰えたり。而してこの爭の原因は種族的なるか、社會的なるか、將た政治的なるかは明かならず、當時トルコにありて專ら爭鬪を事とせるもの、黃、黑の二姓黨あり、王位繼承の爭ある每に、各自その候補者を擁立せり。七六〇年突厥帝國は遂に葛邏祿即ちカルルク(Karluk)のために滅ぼさる、カルルクはアルタイ山脈の西部に住するトルコ・モンゴリア種族の一派なり。突厥の滅亡後、その殘黨はグズ(Ghuz)[オグズ(Oghuz)]として史上に現はる、かのセルジウク、オスマンリ等、イスラム教に歸依せるトルコ諸種族が、西部アジアにその勢力を振へるは、更に後章に至り述ぶる所あるべし。

突厥の滅亡後、これに代はりて中央アジアの主權を掌握せるものをヰグルとす。ヰグルは當時の回紇或は回鶻にして、もと突厥に屬せしが、東突厥の亡ぶるや、ヰグル遂にその地に據り唐に附く。第七世紀の中頃に至りてヰグルの勢強大となり、その酋長骨力裴邏全く突厥の餘衆を降して自ら可汗と號し、牙を烏德犍山に建て、その版圖東は滿洲に接し、西はアルタイ山に至り、悉く突厥の故地を奄有し、唐の封册を受け

て懷仁可汗となれり。後支那に安史の亂起るに及び、懷仁の子葛勒可汗は兵を出して唐を援け、また葛勒の子牟羽可汗は自ら將として支那に入り反徒を伐てり。こゝに於いて唐は或は金帛を贈り、或は公主を與へてその恩に報いしも、ヰグルは尙ほこれに甘んぜず往々支那を侵し、七六五年には唐の叛臣僕固懷恩の誘ふ所となりて吐蕃即ちチベット人と共に大擧して支那に寇せり。而かもこの時ヰグルは郭子儀の說諭を受け、却て唐軍と合して吐蕃を破りしが、旣にして牟羽は唐の喪に乘じて入寇せんとし、その相頓莫賀の諫を顧みず、頓莫賀怒りて牟羽を弑し、自立して天親可汗となり、婚を唐に求めてこれを得たり。然れどもヰグルは支那と通じて其歳幣を貪るに從ひ、漸く奢侈惰弱となり、屢〻吐蕃の侵略を被ふりて國威頗る衰ふ。偶〻南西シベリアの黠戛斯即ちキルギス(Kirghiz)有力なる部族となり、唐と同盟して八三〇年ヰグルの主權を顚覆しぬ、蓋しその原因西方貿易の占有權にあるが如し。而してキルギスは、當時ヰグルの領土を經て支那に至る、大食即ちアラビアの隊商を護送したりといふ。

## 第十八章　チベットの盛衰

チベットは多年中央アジアを震動せる大革命の影響を受けず、偶〻これを受けたるも

のはその國境地方に過ぎざるのみ。チベットの國境に住する諸種族は、昔時中部地方より移住しきたれるものなり、蓋し南部にはヒマラヤ山ありて長へに交通を絶てども、北部にありてはその事情全くこれに同じからず、故にこの方面に於いてはチベットの住民にしてタリム盆地に移住せるものあり、南東に於いてはまた支那に赴きてその住民と同化せるもの少からず。チベット本部は全く世界と離隔し、他の諸國と交通するの道を有せず、且つその大高原たる、夏は炎熱燒くが如く、冬は積雪地を埋むるが故に、近隣の遊牧民また侵略を敢てするものなし。事情已にかくの如くなるを以て、チベットは長く外界の刺激を受けず、文明の種子の如きまた幾多の歳月を經てその地に發生せり。

チベットの住民は元來悉く狩獵を以てその業とせり、蓋しその地狩獵に適するによる、されど植物にして食料に適するものに至ては極めて少し。短顱種族と共に起れる古代の農業生活は、たゞタリム盆地に移住せる進歩的人民の間に行はれたるのみ、而してこれ等進歩的人民の、廣く農業をチベットに傳へざりしは、これに適するの地たゞ南方ブラーマプトラ(Brahmaputra)インドス(Indos)兩河の上流に存するによらずんばあらず。南方の諸地方に發達せる文明の萠芽はもと印度より來れるものにして、

印度のアーリア住民が、その文明を創建せる後に屬す。故にこの事情は、チベットの文明の徐々として進めると、印度の影響の大なりしとを説明するの助となるものなり。

北部及び中部チベットの住民が、中央アジアの住民に學びたるものは、古代の農業生活にあらずして、その遊牧生活にあり、而してこの事に關しては論ずべき點なきにあらず、即ちチベットの住民が全然遊牧生活を中央アジアの住民に學びたるか、或はまたその地に產する犛牛を飼養して、遊牧民生活に益する所なかりしかといふことこれなり。犛牛の北部に弘布せるは、トルコ・モンゴリア種族は、勿論、アーリア種族また始めてこれを飼養せるを以て知るに足る。チベットの住民はもと貨車を運搬に用ひることを知らず、然れども諸種の動物就中犛牛を使役して貨物を運搬することを知れり。而かも遊牧生活の傳來後、容易に諸所に移住して人口の繁殖に應じ、且つ遊牧民の特徵たる掠奪を喜ぶに至りき。弓はチベットの國民的武器にあらず、これまた中央アジアより傳來せるが如し。

チベットの諸種族は互に相爭ひ、且つ北方に生活せるモンゴリア諸種族と戰ひしも、大にその勢力を擴張して定住民を掠むるに至るまで、歷史に重要なる戰爭をなせることなし。西部及び南部に至るの道には、自然の障碍ありて到底これを破ること能

はず。然れども北部に於ては大商路あり、これによりて容易に前進することを得べし、北東に於いてはまた支那の富その掠奪に委せられたり。モンゴリアにては、幾多の小種族この種の掠奪的遠征に加はらんがために、相結びて已に匈奴の大帝國を形成せるにチベットにては諸種の事情、諸種族の政治的統一に利ならざるものあり、從ひてその成ること遲く、且つその成功顯著ならざりき。されど一部の國境種族は屢々支那の各朝と衝突してその征服する所となれり。而してその大帝國の形成せられたるは、蓋し佛敎印度より入りて、諸種族間の障壁を撤し、國民的結合を鼓舞せる結果ならん。

チベットの古史には有史以前の傳說を記するものあり、而して其記事の信ずるに足らざる、論をまたざれども、またよりて以てチベット文明の由來を知るべきものなしとせず。その記事によれば、前第一世紀の頃近世ラサ(Lhasa)の南方に一神童あり、聰慧明敏にして知らざるものなし、土民乃ちこれを以て天の降せる首領となせり。この神童は佛陀の子孫にして、その地に一王國を創建せしが、その繼承者の世にその臣民漸次文明の域に進み、第二世紀には金屬を溶解し、鋤を以て土地を耕し、また植物に灌漑することを發見し次いで第五世紀には田野の區劃を定め、獸皮を以て衣服を造り、

胡桃を植え、その後また犛牛を牡牛と交尾せしめ、且つ騾馬を飼養することを知れりといふ。この種の傳說は印度文明の直接輸入を承認せざれども、チベット文化の中心を以て印度の國境にありとし、また王室の祖先を以て佛陀に出づとするを以て見れば、その淵源する所また知るべからざるにあらず。印度に於ける佛敎の流布は、傳道の熱心を鼓舞し、新信仰及びこれに伴ふ高尙なる文明をチベットに傳へしがチベットはまたタリム盆地より同一の感化を受けたること爭ふべからず。佛敎の支那に傳播するや、チベットは一面支那と中央アジア一面また印度との連鎖として遽かに重要なる地位を得、その後また佛敎の印度に衰ふるや、遂に北方佛敎の故鄕となれり。

南部チベットに農業を以て基礎とせる一文明國發達せる時、北部チベットの遊牧民は、支那及び中央アジア諸國の制度に倣ひてその領土を組織せり。支那記錄の所謂氐及び羌は北部チベットの遊牧民にして、第一世紀に中央アジア遊牧民の慣用手段を襲用して支那各朝を苦めたり。而してこれ等氐羌諸酋長また匈奴、鮮卑の諸首長に倣ひて、支那一部の君主となれるものありき。

チベット帝國の成れるは、第六世紀に南部の文明國が北部の遊牧民を征服せる時にあり、この後新帝國は漸次その權力を擴張して中央アジアの政治に干涉し、支那の

南西國境及びタリム盆地を經由する商路を脅せり而して新帝國に干渉の機會を與へたるものを突厥帝國の衰頽とす。

チベット帝國即ち吐蕃の初めて支那の注意を喚起せるは五八九年にあり、而して棄宗弄讃以來その諸君主が印度を師として文明を發達せしむるに勉めたるは、六三二年棄宗弄讃がその地に使節を派遣せる事實によりて知ることを得。この使節派遣後、チベットにては佛教に關して精確なる知識を得、また印度に倣ひて一種の文字を發明せり。當時ラサは帝國の首府にしてまた宗教的生活の中心なりき。支那チベット兩帝國の關係は六三五年唐の太宗その將李靖を遣りて青海附近の吐谷渾を破り、その南方に據れるチベット種の一派黨項(Tangut)を降し、遂に吐蕃と接觸したるに始まり、兩軍互に勝敗ありしが、六四一年吐蕃使を遣はして和を唐に請ふに及び、太宗は文成公主を以て棄宗弄讃に嫁し、爾來弄讃は支那の文物制度を慕ひ、その子弟を長安に留學せしめたりといふ。既にして吐蕃は吐谷渾を滅ぼし、更に西突厥の餘衆を率ゐてタリム盆地に逼まり、概ねこれを略し、六八〇年にはその權力を擴張して天山に及べり。唐は六九二年一時吐蕃軍を擊退してタリム盆地を恢復せしが、睿宗の時また公主を棄宗弄讃の玄孫棄隷蹜讃に嫁して和を結びぬ。その後吐蕃はまた捲土重來の

勢を示し、アラビア軍と同盟して、七一五年にはフェルガナに進み、第八世紀の間依然中央アジアの南部に於ける最大勢力として支那を苦しめたり。棄隷蹜讃より二傳して婆悉籠臘賛に至り、唐に安史の亂あるに乘じ悉く甘肅の地を奪ひ、七六三年遂に長安を陷れ、代宗は倉皇陝州に出奔し、長安は吐蕃軍のために蹂躪せられたるを以て見るも、當時の狀態を察知するに難からず。既にして郭子儀の來り討つに及んで吐蕃軍一旦引き還り、これより屢〻支那の邊境を侵すこと絶えざりしが、後その爪牙たりし沙陀、南詔の二部叛きて唐に通ぜしより勢力漸く振はず、八二二年和を唐に請ひ和盟の碑をラサに建設せり。

第九世紀に至りて、吐蕃の權力は頓に衰え、ヰグルは北部の中立地を併呑し、黨項は吐蕃に對して國境の守備に任ぜしが、黨項の部長拓跋思恭八八四年を以て、黃河の上流夏州に西夏の基を翔めたり。一〇三八年西夏の主李元昊は自ら大夏皇帝と號し、支那の西邊を侵して宋朝と戰ひ、これより宋或は遼或は金と同盟してその獨立を維持せり。而してその獨立を外部に表明するものは新文字の發明なるも、その歷史には見るべきものなし、たゞ宋遼金と同盟及び戰爭に關する簡單なる記錄あるのみ。

一〇七六年吐蕃軍は西夏に寇せしが、迷信的恐慌に襲はれて急に退却せり。チベ

ットの政治的勢力を失へるは、佛敎の權力俗界の權力を壓倒せるによる、實にチベットの佛敎は他諸國の佛敎とその性質を異にし、その僧侶はまた印度、支那の僧侶の如く、神學上及び哲學上の議論に熱心ならず、深くその國民的宗敎たるラマ敎の感化を受けて鬼神に奉仕し、得々として神怪不可思議なる技術を修す、これ佛敎の僧侶がチベットに於いて最高の地位を得、またその迷信中央アジアに傳播せる所以なり。

第九世紀の末期以來吐蕃は昔日の活動を失ひ、また近隣諸國民の注意を喚起せず、たゞ一〇一五年宋と戰ひて一時その昏睡を破れるのみ。支那との關係は再びチベットの文化を改良し、支那公主のその地に來れる後、酒は米及び麥より造られ、水車は建てられ、織物は織られたり。當時支那の技藝家はチベットに來り、チベットの子弟また屢〻支那に遊學せりといふ。こゝに於いて初め印度の感化を受けたるチベットの文明は、漸次支那の風に傾き、その政府をして支那政府と密接なる關係を結ぶに至らしめたり。

## 第十九章　ササン朝と嚈噠及び突厥との干繫

第三世紀に當りペルシヤはアルサケス朝の勢力全く地に墜ち、一時諸王の王と稱

したるパルチア王の權威は有名無實となり、全國の土地は幾多の諸侯伯の間に分割せられ、これ等の侯伯は各〻嶮要に據りて王命を奉ぜず、また互に相攻伐せり。この時に當りシラズ(Shiraz)の東方なる一寒村の土民にパパク(Papak)といへるものあり、その子アルダシル(Ardashir)の扶助によりて、その領主を倒してファルス(Fars)州を簒へり。而してアルダシルの大膽にして不穩なる性質は、遂にその父の嫌惡を招きたるが如し、何となればパパクの將に死せんとするや、その領土を悉くアルダシルの弟シァプル(Shapur)に讓りたればなり。これより兄弟の間に繼承の爭起り、アルダシルは干戈に訴へてその意志を貫徹せんとしたるも、既にしてシァプルの死により遂にその領土を統治するを得たりき、或はいふシァプルは毒殺せられたるなりと。こゝに於いてアルダシルはアルサケス朝の衰微に乘じて全ペルシア帝國を簒はんとの大志を懷き、第一着手として比隣の諸侯伯を蠶食しぬ。されば諸侯伯は皆アルダシルの勢に敵する能はずして降り、アルダシルはケルマン(Kerman)、スシアナ(Susiana)その他の地方の君主となり、次いでアルサケス朝最後の王アルダヴン(Ardavan)に向て開戰を宣せり。これより兩者の間に戰鬪起り激戰數年に亘りしが、二一八年、バビロニアの戰の結果アルダヴンは斬られ、アルダシルはこの戰場に於いて諸王の王なる稱號を得たりき。

こゝに於いてアルダシルは西はエウフラト河より北はホラズムに至るペルシア帝國を一統し、都をイスタクリ(Istakhri)に奠めしが、次いでその居城をクテシフォン(Ctesiphon)即ち今のマダーイン(Madain)に選びぬ。かくてアルダシルは門閥の榮あるにあらず、また巨大なる財力あるにあらず、匹夫より起りて遂にペルシャを一統し、こゝにササン朝を興して數世紀間内亂の爲めに塗炭に苦めるペルシャ國民を救ひて秩序を保たしめ、これより新ペルシア帝國は東方の一大强國となれり。而して新ペルシア帝國の始祖アルダシルは二四一年を以て死し、その子シアプル一世(Shapur I)位に即き國勢益〻興隆せり。

シアプル一世即位の後十年間はその父の如くローマと戰を交へしが、二六〇年ローマ帝ヴレリアヌス(Valerianus)は遂にシアプルの爲めに生擒せられ、幽囚の身となりて死し、兩國の戰爭始めて終結しぬ。而して現存する貨幣によりてシアプル一世が、ペルシア國外の領地として、ホラサンの東方に至る版圖を有せしことを知る。またニシアプル(Nishapur)市及び北部ペルシアに於ける戰勝も、シアプルの力によるものなるを知るなり。二七二年その子ホルムズ(Hormuz)位に即き、またローマと戰を開く、而して交戰の源因はシリア、小アジア及びアルメニアに對する兩國民の政略に關係

す。然るにササン朝はこれより數代の間勢振はず、顯著なる史實あらざりしが、バーラム・グル(Bahram Gur)の世に至りて稍〻著名なる史實を遺せり。バーラムはキリスト教徒を迫害し、遂にローマと開戰するに至りしが、その破る所となりて和を講じ、キリスト教徒にゾロアストル教徒と同じく布教の權利を與へ、且つ教會を組織することを許可しぬ。而してローマはこの條約によりて、カウカソス山に於けるダリエル(Dariel)越の城砦の守備に對して、毎年犒兵料をペルシアに拂ふことを約せり、これその北狄の侵入を遮斷する西國共同の利益あるが爲めなり。

バーラムはローマとの休戰を利用してバクトリアにその遠征軍を派し、嚈噠と交戰してこれを破りしに、偶〻トランスオクサナを占領せる諸部の可汗は、バーラム及びその朝臣が奢侈に流れて士氣を消耗せりとの流說を信じ、オクスス河を渡り、ホラサンを襲うてその全部を奪掠せり。バーラム乃ち七千人に將として夜これを襲ひ、バーラム自ら敵の可汗を殺し、進んでオクスス河を渡り、東邊の諸部族をして和を請はしめき。四三八年バーラム死し、その子イェスヂゲルド(Yezdigerd)二世位に即き、その在位十九年間、東は嚈噠の爲めにホラサンを侵され、西はローマとアルメニアを爭うて殆ど寧日なく、而かもその晚年には二子ホルムズ三世及びピルズ(Piruz)王位を爭ひ、イェスヂ

ゲルドをして最も苦惱せしめたり。これより先きイェスデゲルドは、ホルムズを立てゝ太子とし、その兄ピルのこれを爭はんことを慮かりて、東邊の一州セイスタン(Seistan)に封ぜしが、ピルズはオクス河を渡りてバクトリアに遁れ嚈噠に賴る。こゝに於いて嚈噠の可汗は兵三萬を以てこれを扶け、ピルズをしてペルシアに還らしむ、ピルズ乃ちペルシアに侵入してホルムズ二世を破り、遂にその一族と共にこれを殺して王位に即けり。

ピルズの治世は多事なりき、史家タバリ(Tabari)の記する所によれば、その初年は數年に亘りて人民饑饉に苦しみしかば、ピルズは一人の餓孚なからしめんが爲めに租稅を寬にし、國庫に藏する多額の金員を出し、また富者に强ひてその附近の貧民を賑救せしめたりといふ。されどピルズが外國に對して採れる政策は、決して稱揚すべきものにあらざりき。ピルズの王位を得たるは實に嚈噠可汗の扶助によれるや大なり、而かもその志を得るに及んで舊恩を忘れ、嚈噠を襲擊して釁を啓けり。而してピルズの背德を以てヨセフ・スチリテス(JosephStylites)氏はローマがペルシアの興隆を嫉み、嚈噠を煽動してペルシャの東境を襲はしめたるに起因すとなし、これに反してネルデッケ(Nöldeke)氏は、嚈噠がピルズを扶けたるを德とし、過重なる請求をなしたる

りて幾多の小戰ありてピルズは遂に恥辱を忍びて和を請はざるを得ざりき。ピルズはその條約に對して義務を負はず、償金を代償としてその子コバド(Kobad)を二年間嚈噠に質とせしのみならず、戰敗の結果ピルズ自ら囚はれたることすらありしが、四八四年大兵を率ゐて嚈噠を襲ひ、反つてその破る所となりてピルズは遂に陣歿し、その公主は生擒せられ、ササン朝の運命旦夕に逼まれり。

この危急存亡の時に當りペルシャ帝國を救へる一貴族あり、その名をスクラ(Sukhra)またはゼミール(Zemihr)といふ。スクラはこれより先き兵を率ゐて、アルメニアの叛徒を鎭定せんが爲めに出陣せしが、ペルシアの凶報に接するや、直ちに國都に歸り、ピルズの弟バラシ(Balash)を擁立しぬ。こゝに於いてバラシは嚈噠と和を講じて歲幣を約せしが、その國庫の空乏せるが爲めに旗下に兵を集むるを得ず、次で四八八年に至り僧侶の忿怒を招きて捕へられ、その兩眼を刳られたり。これペルシアの法律によれば、失明せるものは統治の權なきが故なり。タバリの記する所によれば、これより先きバラシは、其の兄ピルズの在位中既に王位を覬覦し、嚈噠に走らんとしてニシアブルにあるや、一貴族の女と婚して有名なるアヌシルワン(Anushirwam)を擧げ、尋で

嚈噠に走りて止まること四年、遂にその援兵を得てペルシアに歸り、ニシアプルに達するやピルズの死を聞きて位に即き、その年少なるの故を以てスクラに政を委任せしが、既にして庶民のスクラを尊敬すること己に過ぎたると、スクラが、己の命を奉ぜざることあるにより、遂にこれを殺害せりといふ。

バラシの死後ピルズの子コバト即位せしに、十年を經てマズダク(Mazdak)といへるもの出でゝ自ら豫言者と稱し、一切の人は同等にして上下貧富の區別なきことを主張しぬ。而してマダズの唱ふる所は、一見近世の社會倫理說と暗合するが如きも、マズダクは敬神にして節食をなし、極端なる制慾主義を實行し、且つ肉食を禁じたるが如き社會的ならざる他の一面を有したり。コバドは貴族及び僧侶の反對派を制肘せしが爲め、マズダクを懷けてその援助たらしめんとせしが、マダズクの弟子中その師の制慾主義に不滿を抱けるもの多く、却つて貴族、僧侶を扶け、遂にコバドを捕へてこれを幽し、その弟ジャマスプ(Jamasp)を立つ。既にしてコバドは幽囚より脫して嚈噠に走り、五〇二年大兵を率ゐてペルシアに歸り、ジャマスプを逐うて王位を恢復せり。これより後のコバドの歷史は、その即位の初年に於けるが如く國步艱難なりき、而してコバドが王位を恢復して國內の整理未だ緒に就かざりしに、東ローマと戰端開け、

交戰數年に亘り爲めに西國をしてその國力を消耗し蠻人侵入の好餌たらしめたり。かくて五〇六年兩國の間に休戰の約成りしも、ペルシアは未だ北狄と戰へるを以て尙ほ安寧なる能はず加之マズダク派放恣を極め、遂に土地を所有して抵抗するに至りしかば、コバドは益〻苦境に陷りしが、勇氣を鼓舞して大に勢力を增進し、漸くこれを壓服するを得たり、而かもコバドは多年の努力に身體衰弱して、その後三年遂に黃泉の客となりぬ。

こゝに於いてホスロー一世位に即く、即ちアヌシラワンにして古代ペルシアの史上最も著名なる賢君と稱せられたる人なり。ホスロー即位の初め、先づマクズ派の禍害を除きて國家の秩序を恢復し、次いで東邊の諸州に侵寇せる嚈噠を擊攘せんと力めしが、偶〻嚈噠は東の方突厥に脅迫せられて勢頗る衰へたり。突厥の木杆可汗は五五四年西進してヤクサルト河を渡り、バダクシアン(Badakshan)に侵入して嚈噠を破り、ホスローと同盟して嚈噠の地を分割し、突厥はトランスオクサナを取り、ペルシアはバルク(Balkh)及びトカリスタン(Tokhalistan)を占領し、オクスを以て兩國の境界としぬ。かくてペルシアに對して多年苦痛を與へたるバクトリアは遂にペルシアの領域となり、ビルズ以來の努力はこゝに至り始めて成功せり。ホスローは突厥の公

主を娶り兩國の和親を謀りしが、東ローマは突厥ペルシアの同盟を以てローマ領を危くするを恐れ、屢〻突厥に使を遣はしてこれを離間せんとせり。ホスロー乃ちデルベンド(Derbend)市を建設して、突厥の侵入を拒止する軍隊の駐屯地としき、而してこの市街の完成せるによりてホスロー及びペルシア國民は、始めて北狄侵入の災害を免かるゝを得たり。

五七九年ホスロー死し、その子ホルムズ四世位に即く、突厥公主の生む所なり。ホルムズ位に即きて後、幾許ならず、東ローマと戰を開きしが、またその外戚たる突厥と釁を生じぬ。こゝに於いてホルムズは周圍に敵を受け、突厥軍三十萬は侵入してバヂス(Badjis)及びヘラット(Herat)に至り、ローマ軍八萬はシリアに於いてペルシャ軍を破り、ハザルの部酋はデルベンドを襲ひ、アランの二酋長はエウフラト河畔の平野を劫掠せり。恰もこの時突厥の可汗は驕慢なる書簡をホルズムに贈りて曰く、鄕の橋梁及び道路は能く修繕せられあるや、否や予はペルシアを通過してローマに赴かんと欲す云々と。こゝに於いてホルムズはこれに備へんが爲め、ライ(Ray)の貴族バーラム・フビン(Bahram Chubin)に命じて、老錬なる二万の軍隊に將として突厥の侵入を防止せしむ。バーラム直ちに進んで境上に逼まれる突厥軍を突き、その中軍に溝まりて

之を破り、廿五萬頭の駝駱及び夥多なる物資を獲てホルムズに贈り、更に轉じて外カウカシアに進み、ローマ軍と衝突して大敗しぬ。ホルムズ大に怒りてバーラムの職を褫ひしが、後その叛を誣ひて五九〇年遂にこれを逐へりといふ。

ホルムズの後を繼げるはホスロー二世にして、パルギズ(勝王)の異名を有す。ホスロー即位の初め(已を扶けてペルシアの王位を得せしめたる叔父ベンデー(Bendae)を殺害し、更に他の叔父ビスタム(Bistam)を殺さんとするや、ビスタム遁れて突厥及びダイラム(Daylam)部の扶助を得て、六年間ホスローに對抗せしが遂に力屈して降伏せり。ホスローは是の如く德行を缺けるも勇敢にして智略あり、東ローマの衰頽に乘じて東方の主權を握り、六一三年ダマスクス(Damascus)に勝ち、翌年イルサレム(Jerusalem)を討てこれを降せしが、偶〻一大勢力アラビア半島より起りてペルシア及び東ローマを破り、西アジアの主權をこれ等の老衰國より奪ひ、古代の宗教慣習を一變せしむるに至れり。

# 第廿章　モンゴル時代以前に於ける中央アジアの文明及び宗教の狀態

文明の進歩が宗教的傳道と密接なる關係を有し、僻遠未開の地に文明を傳へんとするもの丶目的は、主としてその信條を弘むるにありしこと、チベットの例によりて明かなり。東西の貿易は勿論中央アジアの文明に貢献する所ありしも、最も熱心に文明のために盡せるものは、或はアジアの中心に進み、或は大商路によりて東方に向へる外國の傳道師なりき、蓋し未開諸國民に高尚なる文明を傳ふるに必要なる忍耐はたゞ宗教的熱心より生するものなればなり。中央アジアと壤を接する諸國には、實際世界的宗教と稱すべきものを生ぜず、且つ佛教を離れては、その傳道師を中央アジアの地に送れるものなし。故に支那の如きも多年中央アジアの諸族を化することも能はず、而して後年遂にその目的を達し得たるは、必竟佛教に鼓舞せられたる結果のみ。

中央アジアの本來の宗教は、一般に原始的人民の間に行はるゝ單純なる神秘教にして、僧侶は神怪不可思議なる力を有するものにして尊敬せられ、災厄を攘ひ、疾病を治するとを以て其主もなる職務とせり。而して最高神に對する信仰の如きは第二位にあり、靈界の生活に影響を及ぼせると極めて少し。北部及び中部の諸種族間に行はれし神秘教の僧侶は、大鼓を亂打してその精神を亂し、これによりて精靈と交通

するに勉む。されどその所謂精靈は他諸國民の想像するものとその性質同じからず、高尚なる宗教の已に傳播せる所に於いても、かくの如き神秘教は一般國民的宗教として多年存在し、實際他宗教の上に一種特別の地方的性質を印せり。中央アジアの遊牧民より見れば、僧侶は皆一種の魔術家にして、疾病を治し、禍福を豫言し、奇蹟を行ふの力あり。而してこの思想には諸宗教本來の教理を腐敗せしめたるものにして、佛教ネストリウス(Nestorius)教またこれを免るゝこと能はざりき。

高尚なる宗教には皆その根據とする聖書あり、これを以て文明の第一階段たる文字は宗教に伴ひて疾かに諸方に傳播せり。諸神諸聖の偶像及び殿堂は、また傳道上甚だ必要なるものにして、新教理の勝利を告示す。中央アジアはその地位上、諸種の文明及び宗教を傳へてこれを混和し、而かもまた昔時よりその地に住せる種族の特性を失ふに至らず。されば一種の文明夙にその沃地に發達せるも、この文明は慓悍なる遊牧民の侵寇後頓にその勢力を失ひ、他の文明の刺戟なくしてその進歩を繼續すること能はざるに至れり。諸種の文明及び宗教の混和を促せるものは、反對の教理相踵ぎて中央アジアに現はれず、キリスト前後數百年間、諸種の教理相幷びて根をその地に下せるにあり。佛教は最も早く中央アジアに傳播し、最も顯著なる影響を

その住民に及ぼしぬ。ゾロアストル(Zoroaster)敎の勢力を得るに至れるは、二五〇年その僧侶が、イラン思想の復興に刺激せられて傳道を企てたるによる。而してキリスト敎またこれと連合して、その擁護者を求めたりき。されどこの二宗敎の完全なる勝利を得たるは、イスラム敎が中央アジアの一部に勢力を有し、中央アジア及びチベットより傳來せる佛敎また東方に流布せる時にあり。而かも印度と直接關係を有する、東部トルキスタンの佛敎は全く滅亡せり

中央アジアの宗敎的狀態は、その文學的材料によりて略ほ知ることを得べし。されど近來タリム盆地の古物研究大に進み、その結果また頗る見るべきものあり、學者をしてこれによりてその智識を擴め、且つ諸種の文明及び敎理の、この地方に及ぼせる影響を確知せしむ。スエーデン及イギリスの探檢家がタリム河の西部流域に、印、度の佛敎徒、支那、ペルシア二國民の遺物、誌銘並びに偶像を發掘せるは、學界を裨益せること少からず、而して偶像は銅より成り、多くはアルタイ地方より來れるものなり。

佛敎が西部中央アジアに重要なる地位を占めたるは、主としてモンゴル時代以前に屬す、而して佛敎僧侶の爭うて國外に傳道せるは、新宗敎の基礎印度に於いて鞏固となれる後ならざるべからず。阿輸迦(Asoka)大王の時代は實に佛敎の北部印度に

勝利を得、且つ政治上及び宗敎上、印度の勢力の北西に及べることを表示するものなり。中央アジアに至る橋梁たるカシミル（Kashmir）は、阿輸迦王の主權を承認せしも當時佛敎は鞏固なる基礎をカシミルに得ること能はず、屢々古代の拜蛇敎及び波羅門敎と戰ふの必要ありしも、タリム盆地の沃地に於いては、容易にその住民の歡迎を受けたり。

外部に於いては、佛敎は必ずしも純然たる印度の文化を伴はず、イラン種族は率先して印度に寇し、その國民性の跡を風俗及び習慣の上に留めたり。然れどもアレクサンドル大王以後バクトリアに存在せしギリシアの文明はタリム盆地及び北西印度の技藝に有力なる影響を及ぼし、佛敎僧侶の熱心に傳道する所必ずギリシア技藝に有力なる影響を及ぼし、佛敎僧侶の熱心に傳道する所、必ずギリシア技藝の要素を伴へり。而して北西印度の技藝及文化は、新にタリム盆地に根據を得西方の古代佛敎とチベットに起れる東方の近代佛敎とは、またこの地に劃然たる區別を生ぜり。

これを要するに純粹の印度種族は、新信仰を說きたるもの結果、印度語を諸方に傳播しぬ、蓋しサンスクリット及びパリー語は經文の理解に必要なればなり。而して印度の感化の他に及べるは于闐を以て初めとす。傳ふる所によれば、阿輸迦王の王子

この地に一王國を創建せりといふも信ずるに足らず。于闐は地理上中央アジアと印度との連鎖を作り、その文明にはまた印度の感化を受けたるの跡あり。佛教の堂塔及び僧院はその地に創建せられ、且つその沃地は、宗教上重要なる地位を占むるによりて、屢〻强大なる勢力を振へり蓋しこの沃地は東西交通の鍵鑰として有らゆる中央アジアの征服者が無限の價値ありとせる所なればなり。佛教は于闐よりタリム盆地及びその北境に傳播しぬ、而してこれを證するものは、近來東部トルキスタンの西境に發見せられたる印度風の殿堂並にギリシアの感化を受けたる佛教藝術家の製作なりとす。當時最も熱心に佛教を採用せるものは、この地の定住民にして遊牧民に至りてはこれを喜ばざりしが如し。突厥の一顧問官いはく、都市及び佛教の殿堂を創建するは、遊牧民の不利とするところなり。何となれは、これその生活方法に反し、またその精神の破壞するものなればなりと、實際佛教は支那の擁護によりて中央アジア諸種族の勇氣を滅ぼせり、突厥顧問官の言當れりといふべし。

佛教に次ぎて勢力を有せるゾロアストル教は、屢々イランの領土となりし西部トルキスタンに傳播せり、而かもその東方に進むや、主としてペルシア商業家の往復せる商路によりしも、佛教に比すれば、重要なる地位を得ること能はざりき。ゾロアス

トル教は、また西部の遊牧民、就中イラン系のスキタイ種族間に傳播せるの跡あり。光明の神と暗黑の神とを對比せる古代のスラヴ神話は、イランの太陽崇拜の感化を受けたるが如し。人は光明の神と暗黑の神との中間に位すといふ、アルタイ地方に於ける突厥の宗教思想また然り。キグルその他の諸國に於いては、佛教とゾロアストル教とは一時比敵せり、而して突厥の內亂が、また宗教的爭鬪を加味せしが如きも今詳かならず。

イランの太陽崇拜がサヽン朝時代の初めに新勢力を得るの前、キリスト教の傳道師は已にイランを過ぎて中央アジアに根據をつくれり。ゾロアストル教の復興は半ばキリスト教傳播の反動と認めらる。而して當時イランを越えてその勢力を擴張せるものは、ローマ敎會の一派ネストリウス派なり、この派は率先して西方文明の種子を東方に傳へたれども、僻遠の地に孤立して、絕えず西方と交通すること能はず、これがために忽ちその勢力を失へり。されどネストリウス派の勢力は一時大に見るべきものあり、モンゴル時代の初め、西方のローマ敎會が、この派と氣脈を通じて事を圖れる時モンゴルの諸君主を化して、その信者となし、他の諸宗教就中イスラム教を壓倒するの望なきにあらざりしが如し。第七世紀以後、支那にはキリスト教の祉

會あり、且つ其の信者を戴ける小國あり、ポルトガル探檢家の發見せんとせるプレステル・ジォン(Prester John)の半傳說王國は、元來支那の地に存したりと信ぜらるゝも詳かならず。ネストリウス派の外、マネス(Manes)派の傳道師は、また一〇〇〇年の頃支那に進めりといふ。

西部中央アジアに於ける古代宗敎の豫期は、イスラム敎の傳播のために全然破壞せられたり。而してイスラム敎の他の諸宗敎に勝てるは、その中央アジアに入ること遲く、且つ新理想に充てるによる。イスラム敎の中央アジアに入るや、その諸君主を化して、精神界の最上權をその掌中に收めんとし、激烈なる爭鬪の後第八世紀の初めに西部中央アジアを征服し、次いでタリム盆地にその權力を擴張しぬ。當時佛敎の勢力を有せる于闐は、前後二十五年間イスラム敎の攻擊に抵抗せりといふ。東部トルキスタンの傳說には、この宗敎戰爭に關するものなり、これによれば、イスラム敎の最後の勝利を得たるは、主としてその英雄オルダン・パッジアー(Ordan Padyah)の力によるといふ。而してイスラム敎の勝利は、第十世紀にカシガルのトルコ君主サック(Satuk)がこれに歸依して、タリム盆地及び西部トルキスタンの大部を征服するに及びて完全となれり。されど一〇三七年サックの死するや新帝國の權力頓に衰へ、中

央アジアの遊牧民またその種族によりて、信仰を異にするに至りき。かのトルコ、タルタル派か、主としてイスラム教に征服せられたる中央アジア諸種族より成り、モンゴリア派が佛教の信者を包括せるが如き、以て兩者の關係を知るに足るべし。而かもこの兩派はその起源を同うし、たゞ外國種族の血液を混合せるがために差異を生ぜるのみ。キグル族中には比較的古代のイラスム教徒多しと雖も、他諸宗教の代表者はまたこれと並びて多年その地位を維持せり。

ギリシアの神話は西部中央アジアの宗教に混ぜるが如し。而して宗教の混合は即ち文明の混合にして、長へにこれを表はすものには文字及び文字を記するの術あり。近來トルキスタンに於いて發掘せられたる種々の古物は、インド、ギリシア及びペルシアより出でたる書風の、昔時中央アジアに存せることを明かにせり。この書風は外國の字形を模倣するに止まらずして、別に一種の字形を發明するに勉めたるを表示するものなるが、若し然りとせばこの傾向はなほ明かに、中央アジアの人民が外國の文字を學ぶと共に、一種の新文字を作りて、これに加へたることを示すものなり。而してこの新文字の模範は、已に中央アジアに存せるも、その形狀他と區別すべきものにあらざりしならん。支那の文字は殆ど模範せられざりしが如し、蓋し他諸

國の文字に比すれば、その缺點實に顯著なるものあればなり。印度の文字は殊にタリム盆地に感化を及ぼせしが、これに反して、ペルシアのペーレヰ（Pehlevi）文字はキグルによりて採用せられき、これ月氏族の紹介によるものにして、キグル・はまたこれを突厥に傳へたり。この後ネストリウス派の傳道師は、シリアの文字を傳へしが、この文字の模範となり、次いでモンゴル、マンチュ二種族は、この新文字の變化せるものを用ゐたり。種々の發見によるに、第八世紀及び第九世紀に於ける中央アジアの文字は、その外國より來れるものと國內に生ぜるものとを合はせて、その數非常に多かりしが如し。これによりて中央アジアの住民は、必しも一種の文明に執着せず、その文化の地方的なると同時に、外國の影響に最も動かされ易かりしを明知するを得べし。

## 第廿一章　イスラム敎の勃興とサラセンの侵入

第六世紀の末に當りて、アラビア（Arabia）半島の西海岸には幾多の宗敎行はれ、且つ多少の敎育あるセム種の苗裔こゝに居住し、その首府はフェリクス（Felix）の北部にありて、その名をメッカ（Mekka）といひ、中央にカアバ（Caaba）の神殿あり。カアバの神殿に安置せる黑色の隕石には、アラビア人の護神の靈を宿れるを信じ、これを拜せん

が爲め、半島南部の諸地方より來り詣ずるもの絶えざりき。而してこの神殿を保管する一族をコレイシ(Koreysh)族といひ、その中よりイスラム(Islam)敎の始祖ムハムメット(Muhammed)出たり。ムハムメッド幼にして孤なり、長じて隊商の中に加はり、メッカに往來する商旅または巡拜者に接して、諸種の慣習風俗を見聞せるのみならず、屢々半島北部及シリアに旅して、キリスト及びユダヤ兩敎徒に接して多少學ぶ所ありき。

ムハムメッド二十四歲の時メッカの富裕なる寡婦カヂジア(Khadija)の家に雇はれ、その所有にかゝる幾多の隊商を管理せしが、遂にカヂジアの想ふ所となりてこれと婚を結びぬ。是に於いてムハムメッドは終生糊口の憂を去り、これより俗世間を絶ちて屢、冥想に耽り、その富贍なる想像力を以て一新敎を開くに至り。ムハムメッド四十歲の時始めて「世に唯一の神あり、アラー(Allah)といふ、ムハムメッドはその豫言者なり」と唱へて、從來の偶像崇拜を排せしかば、遂にコレイシン族の惡む所となりメッカを逐はれ、その信徒等と共にメヂナ(Medina)に遁る、實に六二二年七月六日にして、イスラム敎にてはこれをヘヂラ(Hejira)と稱し、紀元元年となす。而してヘジラに二樣の意義あり一はアラビア語のヒジラ(Hijira)即ち逃走の義とし、一は逃走にあらず分離の義

となし、ムハムメッドはメヂナに至る爲め、その一族より分離したりと解す、されど前說に從ふを妥當とす。

既にしてムハムメッドはメヂナ及びその附近の諸地方に多數の信者を得て漸く其地位を固め、遂に兵力を以てメッカを服しその布敎を承認せしめ、次いで幾多の艱難と戰ひたる後、アラビアの全部をしてイスラム敎に改宗せしむるに至れり。イスラムとは聽從の義なり、即ち神の意志に服從するをいふ。ムハムメッドはヘヂラ十六年即ち六三二年を以て死す、その多年の說法は死後二年にして編纂せられ、コーラン(Koran)と稱せられて爾來イスラム敎及びこれを信奉する國民法典の基礎となれり。而してムハムメッドの敎理はもと純然たる宗敎的性質を有するものなりしが、偶〻激烈にして慓悍なるアラビア人の心を鼓舞し、自ら偉大なる潜勢力を有することを確信して遂にこの宗敎的運動を半島以外に向て試みんとの希望を起さしむるに至りぬ。

ムハメッド死して男嗣なし、外舅アブベクル(Abu Bekr)繼ぎてハリファ(Khalifa)と稱す、ハリファ・ラスル・イルラー(Khlifa Rasul Illah)とは豫言者の繼嗣の義にしてこの職にあるものをハリファといひ、その職をヒラファア(Khilafaa)と稱せり。而してハリファは恰も現時のロシア帝の如く政敎二權の主宰者にしてサラセン(Saracen)帝國の主權

たると共に一時東方世界の歴史上主要なる要素たりき。かくてアブ・ベクル以後歴代のハリファは布教の手段として外國征服に從事し、アラビアの將軍ハリド(Khalid)は國人を率ゐて東ローマ軍と戰ひ、これに勝ちてダマスクス(Damascus)を攻略せしが、其後六年を經てシリアの全部及びパレスチナ(Palestina)は悉くアラビア人の手に歸するに至り、ペルシアもまた其の壓迫する所となれり。こゝに於いてペルシアのゾロアストル敎徒はササン朝の下にイスラム敎徒の侵入に對して激烈なる抵抗をなせしが、遂に六三九年ネバヱンド(Nebavend)に大敗しぬ。この戰爭は世界の史上に大影響を及ぼせるものにしてこれよりイスラム敎はペルシアに行はれ更に中央アジアに入り蠻民を敎化せり。而してササン朝最後の王イヱスヂゲルド(Yesdigerd)は東走してセイスタン及びホラサンを過ぎ、メルヴ(Merv)に遁れ附近の民家に潛伏せしが土民の殺す所となりてササン朝遂に亡ぶ。ネバヱンド戰鬪の直接の結果はペルシア古代の文明を破壞したるにあり、卽ちペルシアはアラビア人の爲めに國內到る所强奪せられ且つ蹂躙せられ、この不幸なる住民は曩にマズダク派の爲めに災害を受けたると同樣なる艱難に接したりき、またジバンの記する所に從へば、ハリファオスマン(Othman)は諸將に約するに、彼等にして第一着に土地廣くして人口稠密なる

ホラサンに入りたるものはその地の司政者たらしめんことを以てせしかば、諸將皆これを諾して前進し、サラセンの國旗はヘラット(Herat)メルヴ(Merv)バルク(Balkh)の壁上に揚げられ、サラセン軍は連戰連勝停止することなく、また休息することなくして、その騎馬がオクス河の水を味ふまで前進を止めざりきといふ。

然れどもハリファの勢力は、この頃既に統一を缺きたるを以て、征服したる人民を敎化するよりは、寧ろ壓倒するに適し、またアラビア人が占領したる土地はその住民をして永久の服從をなさしむる爲めに過大なるの嫌なきにあらざりき。こゝに於てアラビア人はその勢力の永久に占領したる土地を維持すること能はざるを意識するや、イスラム敎の信條をこれ等の地に布敎するに力めたり。實に是の如く人種言語及び習慣を異にするものを連結するには、これを措て他に依るべきものなきなり、而してこれより先き波斯及び中央亞細亞の諸國に行はれたるゾロアストル敎の勢力はこの時より全く衰頽するに至りぬ。

かくて波斯は少時無事なりしが波斯人の一奴隷がハリファ・オーマル(Omar)を暗殺するに及んで統一的主權を有せざるサラセン帝國の司政者に對する一般の騷動を惹起す信號となり、六五二年アラビアの將軍イブン・アミル(Ibn Amir)がオクス河畔

なるホラズムに於て波斯軍を打破りしまでこの騷動は鎭定せられざりき。六六二年アブヅラー・イブン・アミル(Abdullah ibn Amir)はホラサン及びセイスタンに遠征軍を派して効を奏し、翌年カイス・イブン・アル・ハイタム(Kays ibn al-Haytham)任ぜられて一時これ等の地方に知州たりしが六六三年に至り、アブヅラー・イブン・ハジム(Abdullah ibn Khāzim)の爲めに廢せられたり。六六五年ジヤド(Ziad)バスラ(Basra)及び東國の知州に任ぜられ六六七年アル・ハカム・イブン・アミル・アル・ギフハリ(Al-Hakam ibn Amir al Ghifari)を以て將となし、ホラサンに遠征軍を派せり、而してアル・ハカムはトハリスタン(Tokharistan)及びバルク(Balkh)の南方及び東南方諸國を占領して、遠くヒンヅクシ(Hindu kush)山に及びたりき。六七〇年アル・ハカムはアシァル(Ashall)の人民に對する遠征の歸途、メルヴに於て死し、翌年ラビー・イブン・ジヤヅル・ハリチー(Rabi ibu Ziyādul Hārithi)その後を繼ぎてホラサンに派遣せられ、兵に血ぬらずしてバルク人の謀反を征服しぬ。次いでラビーはクヒスタン(Kuhistan)に於て、土耳其軍と大に戰ひてこれを撃破せり、而して恰も、この時幾多のアラビア人はその家族を率ゐてホラサンに移住し、此所に定住するに至れりといふ。その後ラビーはまたオクス河を渡りて遠征を試みたるも、對岸の地方に於ては効を奏すること能はざりき。

六七三年アル・ハカム及びその主ジャード相次いで死し、クライド・イブン・アブッラー・エル・ハナフィー(Khulayd ibn Abdullah el-Hanafi)アル・ハカムの後を繼げり、而してシャードはその死に臨みて、クファ(Kufa)バスラ(Basra)及びホラサンの管轄權を擧げてその子ウバイヅラー(Ubaydullah)に讓り、クライドを以てこれに副たらしめたり、こゝに於いてウバイヅラーはイラック(Irak)にその軍隊を糾合し、ホラサンに侵入してオクス河を渡り、ボハラの諸山に突入し遂にラムチナ(Ramtina)及びバイカンド(Baykand)の一半を征服せり。

この時に當りて、ボハラの土耳其人はその王后可敦(Khatun)〔可敦は王后の義〕を戴き、可敦はその子ツグシアダ(Tughshada)の猶幼なるが爲め、その攝政を爲せしも、アラビア人の大軍烈火の勢を以て侵入するや、可敦は倉皇逃れてサマルカンドに入りぬ。タバリの記する所に從へば、この時可敦は狼狽してその穿てる靴の半足を落し、アラビア人の拾ふ所となりて高價に賣られたりといふ。而して可敦はその首府ボハラがアラビア軍の爲めに蹂躙せられんことを恐れて遂に條約を締結し、これによりて可敦は歲貢をアラビアに輸することゝなれり。こゝに於いてウバイヅラーは多數の分捕物を得てメルヴに退き次いでイラックに歸り、ハリファア・モアヰア(Mo'awiya)により

てバスラの知州に任ぜられたりき。

六七六年ウバイヅラーに代はりてボハラの知州となれるサグド・イブン・オスマン(Sagd ibn Othman)は前任者の締結したる條約に拘はらず、ボハラ征服を完成せんことを決定しぬ。而して攝政可敦はこれに對して抵抗するの勢力なかりき、何となればその臣下の王室に對する忠節を疑ふと共にウバイダラーとの戰の爲めにその財源を盡したればなり。されば可敦はサグドに降伏して平和を求め遂にボハラの帝號は玆にその終りを告げたり。然るに土耳其人の中堅たるサマルカンドは未だ征服せられざりしを以て。サグドはこれを征服せんが爲め、可敦より質として取りたる八十人のボハラの貴族を率ゐてサマルカンドに向ひ遠征の途に就けり。

かくて數回の戰爭を經たる後サグドは、土耳其軍を破りて遂にサマルカンドを陷れ、多數の分捕物と共に三萬人の囚虜を得たりき、而してサグドのホラサンに歸らんとして、途ボハラを通過するや、可敦はその八十人の質を返さんことを請求せしに、サグドはアム河を渡りて後これを返へさんことを以てし、アム河を渡るや可敦の使に答へてメルヴよりこれを送還せんことを約しぬ。サグドは是の如くして約に背きつゝ遂に是等の不幸なる質をメヂナに率ゐ還りてその衣服を剝ぎ奴隷の待遇をな

すに及んて絶望の極八十人悉くサグドの邸宅に亂入し、その戶を閉ぢサグドを殺したる後皆自殺せり時に六八〇年にしてイェジド・イブン・メルワン(Yezid ibn Merwan)がその父モアキヤに代りて新にハリファとなれる翌年のことゝす。

新ハリファはサルム・イブン・ジヤド(Salm ibn Ziyad)を以てホラサンの知州とせしが、不屈なる可敦はホラサンの北部を糾合して叛き、アラビアの羈絆を脫せんと企てしかば、サルムは將軍ムハラブ(Muhallab)と議してメルブに根據を定め、强兵六千人を率ゐてオクス河を渡り、ボハラに侵入せり。こゝに於いて可敦は勝算なきを見、ソグドの部長マリクの許に走る、これ可敦は外患あるに際し共に同盟して敵に當らんことを條件としてマリクと結婚せんことを約したるを以てなり。マリクは遂に可敦の甘言に惑ひ、直に兵十二萬人を率ゐて進み、サルムの先鋒を破りその大原を失はしめしが、既にして大に敗るゝに及び、可敦は遂にその企圖を棄てゝ和を請ふ。サルム乃ちこれを許してメルヴに凱旋し、職にあること二年、その間大に人民の尊敬を受けたりといふ。

これより先きハリファ、イェジド死し、六八三モアキア二世即位するや、ハリファ繼承權に關して二人の競爭者を生じ遂に內亂を惹起せり。而して競爭者の一はアブヅ

ラー・イブン・ゾバイルにして一はオムマヤ家のメルワン二世とす。前者はパレスチナ、エジプト及びシリアの一部に於ける土豪の援助を得しが、後者はダマスクス(Damascus)の領主となり、イブン・ゾバイルの同盟軍をシリア及びエジプトより驅逐せり。而してメルワンの子アブド・エル・メリク(Abd el-Melik)は東ローマ帝と和し、その全軍を以てメッカ及びメヂナに據れるムハメッドを擊破してこれを殺しき、時にサラセン帝國はアブッラー・イブン・ハジムの管轄せるホラサンを除きて悉くアブド・エル・メリクの取る所となり、メリクはハジムの到底己に服せざるを察しハジムの部將ブカイル(Bukayr)に食はすに利を以てし、六九二年遂にハジムを逐はしめ、ブカイルを以てホラサンの知州となせり。

この間メルヴに留まりてケシに一國を建設したるムハルラップ(Muhallab)は七〇〇年その子ハヸッブに命じ大軍を率ゐボハラに侵入せしめ、犬にその君主を破りぬ。而してムハルラップはケシに駐まること二年にして其比隣の諸部屬を服して貢進物を納れしめ、次てメレブに歸り七〇一年を以て死し、其子イェジド(Yezid)之に繼て知州となれり。然るに七〇三年に至りてイェジドはハッジアジ(Hajjaj)の爲めに黜けられてホラサンを去り、其弟ムファダール(Mufadhal)はホラサンの知州に任ぜられき。ムファダ

ールはホラサン知州る職にあること僅かに九箇月なりしも、其間にヒバ(Xhiva)及びバヂヒヌ(Babylis)に遠征軍を派して大に効を奏し事莫大なる分捕物を悉く兵士の間に分與して自ら一物も取る所なかりしといふ。既にして七〇五年にアブト・エルメリク死し同年にイェジドのイラク(Irak)に侵入せるによりてハッジアジはキファダールを免黜してクタィバ・イブン・マリスム・エル・バーヒリ(Kutayda idn Mnslim el-Bahill)を以てホラサンの知州となしたり。而してクタィバの盛大なる經歷は彼がホラサンの知州となりてメルブに入りし時より初まるものとす。

中央亞細亞史 終